

ウイグル語写本・‘観音経相應’

—観音経に関する ‘avadāna’—

庄 垣 内 正 弘

は し が き
解 題
テ ク ス ト

は し が き

ここで取り扱うウイグル語写本（以後本写本とよぶ）は1907年に英国の Aurel Stein が敦煌の千仏洞より持ち帰った将来品の一部であり、現在は大英博物館に保存されている。

cursive のウイグル文字で書かれた本写本は、元来15葉からなる独立した冊子本であるが、Stein は “Serindia” の中でこれを、同時に発掘された他の1冊と一緒に Ch. xix. 001 (BM の Or. 8212—75A) の番号中に組み入れた。⁽¹⁾

本写本に関しては、曾て羽田亨博士と Şinasi Tekin 氏とが題目と奥書について触れたことはあるが、それ以外の詳細な研究はなされていない。

本写本は漢字で I から XVI の丁数をつけた14葉(IV, V は欠)と丁数のない1葉とで構成されている。ここでは丁数のついた Ia~IIIa, VIa~XVaの合計24頁（以後この部分を本仏典とよぶ）⁽²⁾について、テキストの転写、翻訳を試みると同時に解題で本仏典の内容及び言語上の特徴に関して若干解説したい。

解 題

(1) 本仏典の内容

Or. 8212—75A に組み入れられたもう1冊は—75B (“Serindia” の Ch. xix. 002) とともに既にその内容が「阿毘達磨俱舍論実義疏」に相

当するとわかっている写本である。⁽³⁾ 本写本が—75A中に含まれているのは、おそらくこれも上記題目の仏典に所属する内容をもってしていると判断されたためであろう。

のちに羽田博士は本仏典に関して、「俱舎論実義疏」に含まれるものであるが、俱舎論以外の別のある仏典の相応の義を説いた部分を引用訳出し、これに付加されたものであり、漢訳俱舎論の第四巻にある相応の義に⁽⁴⁾ 応ずる釈であろう旨推定された。一方最近になって Ş. Tekin は、本仏典を「俱舎論実義疏」とは無関係とし、その内容を *Jataka* であると⁽⁵⁾ 推定した。

しかし、筆者は本仏典の全体を通読することによって、その内容に関して以下のごとく解題したい。

先ず、本仏典の内容は、その体裁上から明らかなように3部の小篇が結合した形式で構成されている (Ia-1~IIIa-14, VIa-1~XIb-5, XIb-6~XVa-11)。各篇はそれぞれ独立した内容をもってはいるが、それらの構成は同一形式といえる。即ち各篇は、表現上の多少の差異はみられるが、同じ内容を表わした次のごとき冒頭文にはじまっている：

今此已後説相応義 amti mundata inaru bu sudur ärdininiḡ 相応
 今 此より 後 この 経 宝の 相 応
 tigmä bir nom töziḡä yaraşı aydan nomuḡ tanuḡ tartip sözlägülik
 即ち 一 法 性に 相応する 譬喩 法を 引 証して 唱えるべき
 käzig ol amti anı sözläyü birälim qop süzüḡ kirtgünë köñülin
 次第 なり 今 それを 唱えて やろう 全て 清淨なる 信心の 心で
 äsidzünlär tıñlazunlar (Ia-1~4)
 聽 聞すべし

既にこの冒頭文の内容から本仏典全体の性格を推定することも可能である。先ず冒頭の漢文はつづくウイグル語に翻訳されているのであるが、漢文中にみられる「相応(義)」という漢語はここでは更にウイグル語で bir nom töziḡä yaraşı aydan nom 「一法性に相応する譬喩 (*avadāna*) 法」と注釈されているのであって、これが羽田博士のいわれる漢訳俱舎論の第四巻に現われるいわゆる「心相応法 (*skr. cittasampratyukta dharma*)」と同じ意味での仏教術語を示すというのは疑問である。実際に、⁽⁶⁾ 以下に掲げるテキストの内容が心相応法に関係しているとは考えられない。それ故この冒頭漢文のみから本仏典を第四巻の相応の義に⁽⁶⁾ 応ずる釈であると判断することはできない。

更に、上掲ウイグル文中の bu sudur ärdini に相当する語句は各篇の

冒頭文以外にも第一篇 (IIB-13) と第三篇 (XIVb-4, 14) の本文中に出現するが、前者からはこの sudur ärdini の実際の経名が、いわゆる観音経を指すものであるということがわかる。そこで、この sudur ärdini を観音経に置きかえてもう一度冒頭文を解釈し直すならば、本仏典は、観音経に関係した一法性に相応わしい譬喩法を引証して唱えた3小篇よりなる仏典であるという事実が明らかになる。第三篇末に「観音経 sudur-nun 相応是」という一文が掲げられているのは、即ち本仏典の題目を表示したものと解釈して差し支えなからう。おそらくこの仏典は、当時盛んであった観音経が説かれた直後に唱えられたものであると推定できる。

この冒頭文の後には各1篇ずつの譬喩が続く、いずれも衆生が発心して仏をはじめ僧伽を供養し、その功德によって仏より仏果への記を授けられるという内容のいわゆる授記物語である。

更にこの譬喩の後には、本仏典の聴衆が観音経を聴聞することによって自らもこの譬喩の登場人物のごとく記を授けられるであろう、しかしたとえこの時に授記されなくとも、この現世で為した功德によって来世において必ずや再び授記の機会を得ることになるであろうという内容の聴衆へ向けての二段構えの授記が述べられているのである。⁽⁸⁾

ところで、本写本には3箇所にも奥書の形式をとった文章がみられる。これらについては羽田博士及び Ş. Tekin によって詳細に解説されているが、その1つ (XVb) は蒙古人によって蒙古語で後世に付加されたものであって、本仏典の内容とは関係しない。残りの内の1つは第二篇末に1行をもって次のごとく書かれている：

tükäl tämür tu q(a)ya ğizindim qoın yil onunc ay biş otuzqa
トニケル テミユル 都統が 尊敬し 書いた 羊 年 第十 月 二十五に

saçu baliqta (XIb-5)
沙州 城で

今のところこの羊年が西暦の何年に当たるのかわからない。しかし、本仏典の少なくとも第二篇がこの日付の日に沙州城で Tükäl Tämür 都統の手で書写された可能性は強いといえる。⁽¹⁰⁾

残る1箇所は XVb の白紙の上に本文とは離れて次のごとく書かれている：

bu ğaırsı män tükäl tämür-nıñul tip bir kızıg kiä bitimıs
この 冊子 我 トニケル テミユル のもの と 一 行 のみ 書き

boldum cin
なした(我) (?)

män toŋa buqa šabī oqıyu täğindim sadu sadu bolzun qutluŋ
 我 トンガ ブカ 沙弥 読み 了えた、 善哉 善哉 福ある

biçin yıl ikint (i ay) biş yaŋıqa saçu baliqta ötig qılıp bitidim
 獵 年 (第)二(月) 五 日に 沙州 城で 祈願して 書いた

kinki körgü bolzun tip.
 後に 幸福? なれ ど

しかし、この奥書は明らかに本文とは異った字体で書かれている上に書写人である *tämür* の t を文字 D で表記したり、あるいは *ikinti ay* と書くべきところを *ikint* と尻切れに書いてみたり、写本全体の正字法から判断して不自然な点が多い。また、その書かれた位置からしても本仏典（本写本）の奥書として認定するには疑問が残る。更に、上掲の *Tükäl Tämür* 及び *Toŋa Buqa* は 75A の別の 1 冊「俱舎論実義疏」の前綴に一応奥書の体裁をとって書かれた次のごとき内容をもつ文章にも現われる。「南無仏、南無法、南無僧、余トンガ・ブクハ諸仏菩薩尊位に稽首す」「竜の年第二月十五日に、余チュケル・テムル此の経を書写し了れり、善哉」（羽田 p. 168）。

もし上掲の全ての奥書が奥書として本来的に正確であったと仮定するならば、本仏典は第二篇を書写した *Tükäl Tämür* の所有物であり、*Toŋa Buqa* が読誦したもので、更に彼ら両人は、同時に「俱舎論実義疏」の書写人あるいは関係者であったことになる。しかし、たとえそれが事実であっても、そのことから上で解明した本仏典の内容が直接「俱舎論実義疏」に関係するという根拠にはならない。ウイグル語の仏典中には幾種類もの異った仏典を同一の仏典のごとく連ねて編集書写した例は他にもある。⁽¹¹⁾それ故、本仏典は、「俱舎論実義疏」とは直接の関係を有しない独立した一仏典と考えるべきである。

Ş. Tekin も本仏典が「実義疏」とは無関係と判断したが、内容を *Jataka* と述べているのは、多分引用された譬喩の一部からそのように推定したものであろう。だが、ここに引用されている物語は积尊の生前談を専らとする *Jataka* というよりは、むしろ上述したごとく十二分教中の記別 (*Vyākaraṇa*) の内容に近いものであり、ここでは冒頭文で *Avadana* と表示されていることから、後世の説一切有部などで一般的であった単なる物語としての譬喩と考えるべきである。

本仏典には上掲の不確実な奥書の他に、第三篇の本文中にこの仏典の

素性を更に明確に示す文章がみられる (cf. XIVA-11~b-6)。即ちこの部分からは、本仏典が、使者タルハン・バシュハガン (ilči yalavač taruxan bašxaγan)⁽¹²⁾ 率いる‘高昌国’ (qoču ulus) において実際に唱えられていたものであり、高昌人のために書かれた仏典であるという事実が推定される。この事実ならびに本仏典の文章の大部分が頭韻をふんだウイグル詩特有の形式を調えた韻文で書かれていることを考慮するなら、本仏典は既存の仏典類を利用して独自に、しかもウイグル語でもって作成されたという可能性が考えられる。しかし、にも拘わらず仮にある原典からの翻訳仏典であるとするなら、既にそれは⁽¹³⁾ 翻案されたものであり、翻案仏典と呼ばれるべき性質のものであろう。

本仏典のウイグル語の書写年代については、正字法あるいは書体などの特徴から判断して元朝時代の書写と考えて間違いないであろう。

(2) 言語面での特徴

(音素は本仏典の文字体系から、古代及び中期トルコ語資料を参考にして決定した。但し音素記号 / / は便宜上本仏典に現われる単語のみ使用した。)

文字と音韻

/a/ は /aCC-/ の連続において文字” のかわりに /ä/ を表示する文字’ を用いる場合がしばしばみられる: /amti/ ’MTY(Ia-1) /amril-/MR YL(Ia-9) etc. 若干の単語では常に語中の /a ä/ を表記しない: /yarliqa-/YRLYĠ’-(IIa-16) /yämä/YM’(Ia-4) /täñri/TNGRY(XIIIa-1) /atlaγ/”TLĠ(Ia-6) etc.⁽¹⁴⁾

/ü//ö/ は /yü-//yö-/ の連続では文字 Ü のかわりに U を用いる。また /süü//küü//köñül/ のはじめの母音は常に U で表記される。

/q//r//x/ は同一文字 Ġ で表記される、時々現われる Ġ に付加された 2 点は /q//x/ を表示するというよりは語中の’ (/a//ä) N から Ġ を区別するのに用いられていると考えられる。

/n/ はまれに有点の形式もみられるが無点の文字 N はほとんど’ と区別できない。

/t/ は初頭位を除いては /d/ の表記文字 D によって表わされる場合が多いが、これは元朝時代のウイグル語正字法の最大特徴といえるであろう

う: /itig/IDYG「飾り」(VIIa-3) /tutmaq/ TUDM'Ġ「得ること」(Ib-4) etc.

/š/ は /s/ の表記文字 S を使用する機会が多いが時には S に 2 点を加えた Š によっても表わされる。

/v/ の表記文字 V は語中では /y//i/ を表わす文字 Y と区別がない。

/z//ž/ は語中では S を代用する。

/a ä n x q ʔ/ はアラブ文字文献にみられるごとく鉤を省略して単に直線で表記される場合がしばしばある: /burxan/BUR-N(VIIb-1)/saqal/S—L(VIIIb-1) /baʔsi/B—SY(IIa-6) /aʔlati/—L-DY(10a-14) /yanjınca/Y—GYNC' (10b-10) etc.

複合形式の外來単語 /quansīim/「観世音」及び /paricatik/'pārijātaka' は ĠU'NSY'YM, B'RY'C'DYĠ のごとく綴られているが、これは書き手が鉤によって複合性を強調したものと考えられる。一方、複合接尾辞 /-dūktä/(/dük/=past, /tä/=loc.) の /t/ は前接する文字と連続しているにもかかわらず初頭位の文字形式を用いる。

ウイグル写本には母音文字 U や I を重ね書きして長母音表記する例は多い。しかし本仏典には文字 ' を重ねて長母音 /aa/ を表示する例もみられる: /saać/S'C「髪」(VIIb-6) /anaatapīndiki/AN'D'BYNDYGY < skr. *anāthapīṇḍika* (XIIb-12)。

本仏典のウイグル語における音韻上の特徴として、本来は(C)VCCV-の構造をもつ若干の単語で -CC- の間に常に母音挿入を行う例を掲げることができる: /utura/<utru /oturuʔ/<otruʔ /taruxan/<tarxan /basuruʔ/<basruʔ /tañisuq/<tañsuq.

形態

特に新しい形態は見当たらないが、verbal noun -gü に copula の o₁ が結合した接尾辞 /-gü/ は希な形式であると同時に元朝時代特有の形式といえる⁽¹⁵⁾。この接尾辞は finite verb の機能をはたし、義務・必然の意義を表わす: /sözlägül/SÜZL'GUL「述べるべし」(IIb-4, XIb-2) < sözlägü ol.

また diminutive の接尾辞 -cä と locative の -tä が結合した形式 /-cätä/ は本仏典以外にも熟語要素として *ančata kīn*, *ančata timin* 'alsald' などの例がみられるが⁽¹⁶⁾、ここでは /tägmis-čätä/「到るや否や」

(IXa-3) という更に機能的な接尾辞として現われる。

借用語と仏教用語

本仏典には特にサンスクリット及び漢語来源の多数の借用語がみられる。もちろんこれらの多くは既にウイグル語として定着していたものと考えられる。しかし若干の単語は借用語というより、未だ外国語として取り扱われるべき性格をもっていたと推定される。とりわけ漢字で書かれた漢語をサンスクリット訳し、更にそれをウイグル語に訳した若干の単語が現われるが、そのような漢語あるいはサンスクリットは外国語といえるであろう：

‘大自在天宮 *tigmä aüisvarastan uluḡ ärksinmäkkä täggülük täñridäm iduq ortu qarşı*’ (IIIa-9, skr. *aüisvara-sthāna*), ‘大宝花王座 *tigmä padma kišara kavšabavan atlaḡ uluḡ ärdini-in itilmis linxua čäčäklär ilig orun*’ (IIIa-10, skr. *padma kešara kauša-bhavana*), ‘千光日天 *tigmä saxasira čandiri miñ yaruḡluḡ kün täñri*’ (XIa-9, skr. *sahasra candra*)

このように /*tigmä*/「即ち」に先行する漢字の単語が漢語音で発音されていたという事実 (cf. p. 08) は次のように頭韻をふんだ詩句から明確にされる：

qolusuz ädgülüg burxan qutiḡa alqis birgü täki
 qop törlüg irü bälgülärig körgitü yarliqap
 空王如来 *tigmä burxan bolḡay sizläär tip*
 qutluḡ qutluḡ burxan qutiḡa viakrit alqis birü yarliqadi
 (XIIIb-10~12) 空=chin. ‚k’ung’

また、ウイグル文字転写された漢語形式の単語やサンスクリットの中で、これまでのウイグル語資料に現われなかった単語は借用語として未だ十分に定着していなかった可能性もある。特に次のような漢語形式はその疑いが濃いといえる：⁽¹⁷⁾ /*čay-si*/ < chin. ‚tšai zi’ 齋食 (IXb-3) /*tap-tau*/ < chin. *tâp* ‚d’u 塔頭 (XIIIa-12) /*tay-čun*/ ~ /*tay-ču*/ < chin. *t’âi’ zï’wong*’ 大誦 (XIa-4, XIVb-12) /*qon-üm-kî*/ < chin. ‚kuân’; *ïəm* ‚kieng 観音経 (IIb-12)

しかし、以上のような外来単語の存在は、本仏典の作者あるいは翻訳者が漢語及びサンスクリット（トカラ語？）の両言語に精通していた事

実を示すものといえる。

ウイグル語内の借用語が一体どのような経路を経て導入されたのかは今のところ明白ではない。特にサンスクリット形式の単語は本来の形式を大きく変形したものが多く、途中で第三の言語の介入した疑いは濃い。とりわけ本仏典のサンスクリット来源の単語についていえば、その大部分がサンスクリット本来の形式よりむしろトカラ語の方により近い形式を示しているといえる：⁽¹⁸⁾ /sagari/<toch. AB *sāgare*<skr. *sāgara*(IIb-11), /citri/<toch. A *citre*<skr. *citra* (XIIa-7), /cambudivip/<toch. AB *jambudvip*<skr. *jambudvipa* (Ia-5), /anītyat/<toch. AB *anīyat*<skr. *anīyatā* (Ia-14), /citavan/<toch. AB *jetavaṃ*<skr. *jetavana* (XIIa-8), /kuśalamul/<toch. AB *kuśalamāl*<skr. *kuśalamūla*(IIa-1), /pirasāñci/<toch. AB *prasenaji*<skr. *prasenajit* (XIIa-9), /maxa-sumudar/<toch. A *mahāsāmudār*<skr. *mahāsamudra* (XIb-9) etc.

/viakrit/ は本仏典ではいわゆるサンスクリットの *vyākaraṇa* 「記別」の意味に用いられているが、トカラ語Bにおいてもこの意味を示す単語は *vyākarit* (?<skr. *vy-ākṛta*) という形式を用いる。おそらくこのウイグル語の形式はトカラ語から入ったものであろう。

本仏典には前掲例以外にも漢字で書かれた多数の単語が出現するが、/tigmä/ に先行するもの以外は日本語の訓読のごとく、ウイグル語として発音されていたものと考えられる。この事実は付加された接尾辞の母音調和及び頭韻部分の漢字から明白にできる：品 -lüg(IIIa-3)=bölük-lüg, 世界 -kä(IIIa-3)=yirtinü-kä, 金 -luṛ(VIa-6)=altun-luṛ, 仏-niṅ(VIIIa-1)=burxan-niṅ

umuṛsuz biś aʒun tinlaṛlarqa umuṛ bolup

大 qorqinclarin avinclarin kirtäri tarṛaru yarliqadači

on küclüg uluṛyarliqančuči köñllüg qaṇima

uqa yarliqazun biziṅ ötügümüzni (VIIIa-2~5)

大=uluṛ

仏教用語は借用語以外に本来のウイグル語に翻訳された単語も多い。特に本仏典には多数の仏の異名がウイグル語形式で現われる：/atī köt-rülmis/ 「世尊」(XIIa-2), /kirtütin kälmiš/ 「如来」(IIa-1), /ančulayu kälmiš/ 「如来」(VIIa-1), /köni tüz tuyuṛli/ 「正等覺」(IIa-2), /alqunī

bildäci/「一切知」(VIa-11), /ayaʔqa tägimlig/「尊者」(VIIa-2), /on küclüg/「十力」(VIIIb-3), /käntün tuyunmıs/「自覚」(IXb-3), /nom qan/「法王」(VIa-12), /burxan baʔsi/「仏の師」(VIIa-14), /uluʔ yarlıqančući/「大慈悲者」(VIIIa-4) etc.

韻文

本仏典のウイグル文の大部分は頭韻をふんだ韻文で書かれている。各句末及び節末にはしるしが付けられているので判別するのは困難ではない。各節は原則として4句から構成されている。各句の音節数に厳しい法則性はみられないが、大体は10音節前後に統一されているといえる。頭韻をふむ詩形式はトルコ語あるいはアルタイ諸語本来の形式と考えられるが、4句形式は śloka などのサンスクリット詩の形式を模倣した可能性もある。

語頭音節の押韻には /V-/ /CV-/ の2種類がある。/V-/ には全ての母音が立ちうるが /i/ と /i/, /u/ と /o/, /ü/ と /ö/ には韻の区別がない。この事実は /i/—/i/ が音色の対立において、また /u/—/o/, /ü/—/ö/ がきこえの対立において、それぞれ他の母音間のこれら2種類の対立より弱い状態であったことを示すものといえる。なお、特殊な例としてサンスクリット形式の /ratna/<ratna は常に /a-/ の類に組み入れられるが本来トルコ語は語頭に流音を許さないなのでこの単語も実際には r の前に [a] をかぶせて発音されていたと推定できる：

anda ötrü ol iki turʔaq äränlär
ratna surya täñri burxan başın
amrilmıs turulmıs arxant tıtsırlıy

ayaʔqa tägimlig bursañ quvraʔqa tägdilär ärsär (Ib-13~VIIa-1)
/CV-/ の /C-/ には /tkqb(〜p) s é/ の立つ例がみられる。/V-/ には上掲の /V-/ と同じ種類の母音が立ちうる。但し /yi//yü~yö-/ はそれぞれ /i//ü~ö/ と同じ類に組み入れられるが、これは音声上の類似を表わすものであって、ウイグル語内で y~# (ゼロ) の自由交替あるいは y-># の音韻変化のしばしばみられることと関連がある：

yimig icimig bädütmäk
yig orunlarta olurmaq
iltäki 人-lär birlä ayaşmaq
icilär inilär birlä amraşmaq (Ib-5~6)

ödnüñ qolunuñ inišindin
 ögdi siz bizni tæg nomća yolunmaqündin
 üzäliksiz iduq 仏 qütïña
 yügärü amtï bu tušta alqïs bulmadılar ärsär (IIb-14~16)

押韻のために本来の単語形式を変形したり、あるいは語順を歪めた例も現われる：

tapïr uduγ üzlünüsindä yana
 tarmaraća nom qanı täñri burxan
 tapïrlarıña çarïtlarıña yaraşı
 tañ tañ nomlarır nomlayu yarlıqadı (Xb-3~5)
 /tarmaraća/=darmaraća < skr. *dharmarāja*

çaγ yämä ol ödtä qolta
 çalınlır çoγluγ pïrasänçi ilig başın balıq içindäki
 çavıqmış kügülmiş bayaγutlar amançlar
 çavlaşıp yïrïlip incä tip kəñsäsdiär (XIIa-9~10)
 /çalınlır/=yalınlır

kişmanğarï 天天 -si 仏
 信心 -i küclüg ol sukumarï urıqa
 kin käligmäk ödtä çarïtasuki atlaγ burxan bolγay sän tip
 kirtü viakrüt alqïs birü yarlıqadı (IIa-14~16)
 信心=kirtgüné, 本来は küclüg 信心「強力なる信心」(=仏)
 となるべきところである。

この他に本仏典の詩の中には頭韻と同時に脚韻をふむ形式もある：

arır maxayan 法 -larır äsidip
 alp bolγuluq 仏 qutïña alqïs alip
 asankï paramïtlarır tükätip
 arıγ idug 仏 qutin bulup (IIIa-4~6)

以上、本仏典の内容及び言語について簡単に解説してきたが、本仏典の(19)ウイグル語の書体、正字法が、元朝時代の書写と推定できるOr.8212-108, -109 のものと非常によく似ている点を強調しておきたい。更に、正字

法に関してはやはり元朝時代のものといわれるベルリン蒐集の版本のウイグル詩伝典ともよく類似していることから、本伝典を含む上掲の大英博物館に所蔵されている *cursive* で書かれた写本が元は版本として存在していた可能性も考えられる。⁽²⁰⁾

テ ク ス ト

本伝典のウイグル語は *cursive* で書かれていて、解題で述べたごとく鉤の省略や /v//y/ の同一文字使用などがみられるので、これを直接に文字転写するのは賢明とはいえない。ここでは原則として音素転写を試みる。但し接尾辞に現われる /t//d/ に関しては古代及び中期トルコ語資料から両音素が併用されている接尾辞の場合には表記文字 D T を即わち音素として扱った: e.x. ablative DYN=/din din/TYN=/tin tin/ etc.

また、若干の表記文字の性格を明示するために、次のごとく音素表記した文字の上下に特別のマークをつけた:

- /a/ = 表記文字ゼロ (但し借用語にのみ適用する)
- /C/ = 表記文字ゼロ (但し /C/ は /t/ を除く子音音素)
- /t/ = 表記文字 D
- /q/ = 表記文字 Q
- /n/ = 表記文字 Ñ
- /ʃ/ = 表記文字 Q
- /s/ = 表記文字 Š

ハイフーンは原則として一単語が行末で中断するときのみ施した。

本伝典には書き手による誤写の訂正箇所が若干あるが、ここでは訂正された形式でもって転写する、但しそのようなものには () をつける。

訂正されてはいないが誤写と確認できる単語あるいは著るしく書きくずされた単語は [] でくくる。

語順が本来のウイグル語のものでない場合は下線と矢印でもって本来の形を表示する:

A B C D E F = C D A B E F
 ↑

Ia 1) 今此已後説相応義::

amti mundata inaru bu sudur ärdini 2) -niñ 相応 tigmä bir nom töziñä
 今 これより 後 この 経 宝 の 相応 即ち 一 法 性に

yaraşı avdan nomuñ tanuq tartıp 3) sözlägütlük käzig ol: amti (anı) sözläyü
 相応しい 譬喩 法を 引 証し 唱えるべき 次第 なり 今 それを 唱えて

birälim qop süzüük kirt 4) -günä köñülin äsüdünlär tünlazunlar::
 やろう 全て 清浄なる 信 心 心で 聰 聞すべし、

yämä ärtmiş barmis ür 5) iraq ödtä qoluta: bu oq éambudivip ulušta bir
 さて 過ぎ 去りし 遠い 昔 時 に この 瞻部州 国に 或る
 qutluñ 6) buyanliñ: bay barimliñ aqlıñ küülüg kançanabumı atlay balıq
 幸 福 富 裕 高 名なる カンチャナブミ という 町が

bolur 7) ärti::
 あった、

ol baliqta yämä: asnu asnu azunlartaqi: arıñ ädgü 8) buyanlarnıñ: adıpatıpal
 その 町 には 昔 昔の 世々にある 聖なる善なる 徳 の 増上果の

ärksinmäklig 力 -intä 化 -mis: arıñ ädgü 9) asayliñ çarıtlıñ: amrilmis turulmis
 強力な 力 に 化した 聖なる善なる 意業(の) 行 静 寂なる

tsiliñ iryapatlıñ::
 止 威儀

suv 10) -luñ yalınliñ soruqmıs bilgä: sukuşmaçudı atlay bayañut supirabi
 水 炎に関して 通じた 賢者 スクスマチュディ という 長者が スピラビ

11) atlay qatunı birlä bolur ärti::
 という 夫人 と共に 居たのであった、

anda ötrül ol 二 bir täg: añır 福 12) -liñ qutluñ ülüglüg: amray sävär bägli
 そこで その二人の 全く 重大 福 幸 運をもった 睦まじい 主と

yutuñlı: asay manılayü amru 13) ilinçuläyü: anca anca öd qolular ärtduktä:
 妻とは 食し 快 楽 し このような 時を 過ごしていたとき

avtıapaki alqinip 14) anıñiyatqa sanliñ bolup: adın azunqa bardılar::
 卑しきもの(財?)尽きて 無常へ 属するものとなり 他 界 した、

Ib 1) 子-ları ögindä qanında: usaq kiçig bolup qalsar yämä: 大 aqaları 2)
 その子らは 母 父より 幼いままに 残れども 大 父の

täg ök qatıñlanu tavranu: uñusuz-taqı artuqraq bay boldılar::
 ごたく 精 進し 極めて 大相な 富者となった、

3) bu munı täg: tavarıñ tälim üklitmäk: tariñ tsañlarıñ toşırmaq: 4)
 このように 財を 増 大すること 穀 倉 を 一杯にすること

tarsız qısıñsız äv tutmaq: tapıñçı uduñçılariñ toq qılmaq::
 衰退なく 家を守ること 奴 隷 を 満たすこと

5) yimig icimig bädütmäk: yig orunlarta olurmaq: iltäki 6) 人 -lär birlä
 食料を 増やすこと 高 位 に つくこと 国 の 人々 と

ayaşmaq: iciläri iniläri birlä amraşmaq::
 親睦すること 兄 弟 と 仲良くすること

大 qarılar 7) -iñ kördüktä: uñuru ünüp ayamaq: unuñçı qoltuñçılär quvrañın:
 大 老 を 見たなら 立ち上って 敬うこと、 乞 食 達 の 群 集 を

8) uşatı tidmamaqlarınıñ tildañında inçä tip känşäşü sözläşdilar::
 壊滅しないことの 因について 次のごとく 相談した。(因は父母の善にあるが)

9) öglüg qaqlıy ıduqlarımızqa örgürmädimiz ädgüti tapınçalı: 10) özümüz
母 父 の 聖 (を) (彼らを) 上らせなかつた よく 礼拝して 我ら自身

kiçig bolmaq üzä: ötrü utlısız boldumuz.:
小さいので そこで 志忘となった。

aşamız 11) anamız ädgüsində: artıuça tavarımız bar turur: amti andaç bir
父 母の 善のもとに 充分な 財が ある 今 このように 一

12) ädgülüg iş qılıp: ayayu utlı ötüni körälim tip munça sözläşü 13)
善 事をなして 敬い 報恩を申し出てみよう と このように相談して

tururlarında.:
いるとき

inçä qaltı kündüz açılçuluq xua yavışçuqa: 14) kün täñri tuğa örläyü
恰も 日昼に 開いた 花 鶯へ 日 天 が 上 っ て

kälmiş täg: küçlüg kirtgüñlüg ol oçlan
来た ごとく 強力 信心もてるものがその息子

Ila 1) qıalarnıñ: kuşalamullarınñ bışmıñin körü yarlıqap: kirtütin 2)
達の 善根の 成就したのを 見たもうて 如

kälmiş köni tüz uyıçlı: kişimañgarı atlaç 天天 -si 仏: kääzä yoriyu 3)
来 正 等 覺 作樂 という 天の天 仏が 巡行して

yalnuqlar arasında: kälip tägä yarlıqadı olarnıñ ilinçä ulus 4) -iña.:
人間 の間に 到来したもうた 彼らの 国 へ

anda ötrü ol: sukumarı atlaç uluq qia: suvaşmıs oñuq 5) -mıs usuqmıs 人:
そのときその スクマリ という 長 男は 水を欲した 衰弱した 渴望の 人が

soçiq suvluç yuulqa tuşarça: surt oq 6) burxan başınñ ol orunta yarlı-
冷 水 の 泉に 出くわしたごとく 慈悲深い 仏なる師が その 地で 説かれ

qamışin äşidip.:
たのを 聞いて

ötrü ol 7) aranyadan orunqa barıp: üküş ädgülüg 天仏 -iç toyin tütsilüç 8)
そこでその アランヤの 地へ 行き 多 善の 天仏を 比丘 弟子の

quvraçı birlä: 三 ay biçanqa ötüñüp: ögin qañin tägzig 9) -tä sabda ärtätip.:
集団 と一緒にに 三月 供養に 従い 母 父を 流 転から 済度し

artuqta artuq süzülmäkintin ötgürü 10) atı kötrülmis 仏 başınñ: adaqlıç
充 分に 清浄する ため 世 尊 仏の師の 足の

qoos linxuasında soñ 11) yatıp: andaç tip bäk qaçıç sav sözlädi.:
一對の 連華に 竟に 平伏し つぎのごとく 誓いの 言葉を 述べた

bu ätözüm 12) qurısar qaşsar yämä: puruşlar bamdini başımın: burxan
この 身が 乾き固まるとも 人々の 制御 我が師より 仏

quñña 13) alqış almaqinçä: bu yatıñışımın (örü) turmaçay män tip.:
果への 記を 得るまで この 平伏から 立ち上るまい 我 と。

anda ötrü: 14) kişimañgarı 天天 -si 仏: 信心 -i küçlüg ol sukumarı urıqa:
そこで 作樂という 天の天 仏 信心が 強力なる その スクマリ 童子へ

kin 15) käligmäk ödtä çarıtasukı atlaç burxan bolçay säñ tip: kirtü 16)
後に 再生 時に チャリタスキ という 仏になるだろう 汝は と 真実の

viakrīt alqīs birü yarlıqadı::

記 別を 授けたもうた。

IIb 1) qaltı nātäg ol sukumarı urı: utlılıy yañıılıy törü iyin ävrılı 2)
 恰 も その スクマリ 童子が 報 恩 の 掟に従って 改心し

ulus uluıı 仏 baıřıqa tüsilıy quvraıı birlä: uz uıur 3) -luı tapınıp udunup:
 国の大 仏なる師を 弟子の 集団 と共に 好 妙 に 改 心 し

ol tıldayın 仏 quıına alqıs buldılar ärsär::
 その 因で 仏 果への 記を得たごとく

4) anıulayu oq yämä kim ol: tip ögdi sözlägül::
 このように また 何 某 と 讚を 唱えるべし、

5) amtı yana sizlär (yämä) bu tušta: arıı süzüg 仏 -lar uluşında tuıalim
 今 更に 汝ら また この 時に 聖なる浄なる 仏 の 国で 生れましょう

6) saqının: aranyadan iduq bu orunta: atı kötrülmis 仏 başın: 7) arıasanı
 静慮でもって アランヤの 聖なるこの地で 世 尊 仏 はじめ 聖なる僧伽

bursan quvraııqa aś éayşı anuıup simäkläp: arıuı 8) -raq uz yaraşı tapınıp
 仏僧 集団へ 食物齋食を 用意し 極 め て 好妙に 供

udunup::

養して。

alqu küsüsüg qandurtaçı: 9) adatın qorqınıtın ozıurdaçı: adaq soıında
 一切 願望を満たすもの 災難 恐怖から 救助するもの 畢 竟

kinindä yana: alqu 10) -ni bildäcı 仏 quıına tägürdäcı::
 に また 一 切 知の 仏 の果へ 到らせるもの

qorqınıca (ämğäkkä) tuşduqlarında: 11) qop 心 -in atasarlar quan-şı-im
 恐怖 苦痛へ 遭遇したのにおいて 全 心 で 名称すれば 観 世 音

pusar tip: qodıqı yavız ol andaı 苦 12) -lärindın ozıurup: qutrulmaq yolqa
 菩薩 と 卑 悪のこのような 苦 などから 解脱 する 道へ

uduzdaçı: qon-im-kı atlay bu 13) sudur ärdinıg nomlatmaq üzä::
 導くもの 観音経 という この 経 宝を 唱えてもらうことによって

önräki ol sukumarı atlay urı 14) täg ök: üzäliksiz 仏 quıına alqıs alıuluq
 前述の その スクマリ という 童子 のごとく 至上の 仏 果への 記を得るべき

käzik ärti::

次第 なり。

ödnün 15) qolunuı inisındın: ögdi siz bizni täg nomcıca yolunmaıındın:
 未 来 においても 讚は 我々 のごとき 信者に 許されるので

16) üzäliksiz iduq 仏 quıına: yügarü amtı bu tušta alqıs bulmadılar ärsär::
 極上の 聖なる 仏果へ 今 この 時に 記を 得なかったなら

17) amtıqı qılmıs bu buyanları üzä: alqu ödtä 心 -lög käzikindäki ädgü 法
 只今 なした この 徳 により 一切 時に 心の 次第にある 善 法

IIIa 1) -ları üklyü: adasız tudasız yalanuı yaşın tükäl yaşayu: aıun 2)
 が 増大し 災難なく 人の 寿命を 完全に生き 世界の

üzlünçüsin qačan qılıalı uıraduqlarında::
 極限を いつか なそうとしたとき

atıqay vısay üzä 3) azumadıñ yañılmadıñ: atmıs oq taı taı tavraı arıuıraq
 境 において 迷 惑せず 彼岸の 素晴らしい 極

māñilig 世界 4) -kə barip: baštinqita baštinqi 品 -lüg tuymün tuyp::
樂 世界 へ 到り 上 上 品の 往生を 得て

ariy 5) maxayan 法 -larıy äsıdip: alp bolıuluq 仏 qutına alqıs alip: asankı
聖 大乘 法を 聞き 困難なる 仏果への記を受け 無数の

6) paramitlarıy tükätip: ariy iduq 仏 qutın bulup::
波羅蜜を 完遂し 神聖なる 仏果を 得て

alqu vaynikı tınlay 7) 子-ların: [alasız] yomrı ozıurup qutıarıp: adaq
一切 善行の 衆生 子を 須らく 解脱し 畢

soñında yana 8) 蓮花胎藏世界 tigmä padma kişara galb atlay linxua 9) äcäk
竟に また 蓮花胎藏世界 即ち 蓮華 鶏薩羅 胎藏 という 蓮 華

aylıqı yırtınütäki 大自在天宮 tigmä aıšvarastan 10) uluı ırksınmäkkä
宝庫 世界なる 大自在天宮 即ち 自在処 大 自在へ

täggülük täñridäm iduq ortu qarşıtaı 大宝花 11) 王座 tigmä padma kişara
到る 天 聖 殿なる 大宝花 王座 即ち 蓮華 鶏薩羅

kavşabavan atlay uluı ırđını-in itilmis 12) linxua äcäklär iligi orun üzä
藏処 という 大宝 を 設けた 蓮 華 王 座 上に

abamuluı ödün 13) oluruıuluq ornanıuluq uırayu soqa avant tıday bulmaq
永久に 坐わるべき 特別の 原因を 得ることに

bolıay 14) ärti::
なろう。

善哉善哉莎土娑都

Vla 1) 今此已後説相応義

amtı mundata ınaru bu sudur ırđınıñ 相 2) 応 tigmä bir nom töziñä
今 これより 後 この 經 宝 の 相 応 即ち 一 法 性に

yaşai avdan nomuı tanuı tartıp sözlägülük 3) käzig ol amtı anı sözläytı
相応しい 譬喩法を 引証し 唱えるべき 次第なり 今 それを 唱えて

birälim qop süzük kirtgün 心 -in äşidzünlar 4) tıñlazunlar::
やろう 全て 清浄なる 信心 心で 聴 聞すべし。

yämä bir ödün kim ol: äkıravrt qanların tuııuluqı: 5) äaramabaviki 并
さて ある とき 何某 転輪王の 誕生は 補処 菩薩

-ların törügülüki: äambu sögütin ülanlig äambuşant 6) ariyın bälgülüg:
の 出現は 閻浮の木で 繁った 臚部林の 聖で 明らかな

äambudıvıp yırtınçü yir suvda::
臚部州の 世界で。

kim ol: adaqın yorir 金 7) -luı qaya manıp kälir mañallıy basıuq: kişi
何某 足で 歩く 金 の 身 歩いて来る 吉慶の 塊 人の

körklüg kişarı arslan 8) qanı: yalnuq körklüg yañalar bägi: alqunıñ umuıı
形をした 鶏薩羅 獅子 王 人間の 形をした 象の主 一切の 所望

ratna surya 9) atlay atı kötrülmis tükäl bilgä biliglig 天天 -si burxan ünä
宝 日 という 世 尊 完全 知 天の天 仏 が 出

bälgürä 10) yarlıqap: öñräki 仏 -lar yañınca amraq vaynikiliy oylanların
現し たもうて 前 仏 に従って 愛する 善行の 男子達を

tıläyüz iz 11) -täyü: ozıuru qutıaru yarlıqayur ärti::
探 求 し 解 脱し たもうた。

東
洋
学
報

第
五
十
八
卷

二
四
四

anda ötrü alqunı bildäci 12) nom qañi: raṭna surya 天天 仏: alqu tinlay
そのとき 一切 知 法 王 宝 日という天の天 仏は一切 衆生の

oṭlanrıña 13) anday bir asiṭ tusu bolıusın körü bilü yarlıqap: qırq kolṭı
息子へ このようない 利益に なることを 見 知 したもて 四十億の

14) ariṭ turuq arxant toyın tütsiliq: miñ yul[a] yaruḡları üzä tägir 15)-miläyü
神聖なる 阿羅漢 比丘 弟子の 千 燈 明 において とりかこ

qavzatılıp: aṭır 大 6oṭluṭ yalinliṭ sudarśan baliqqa baru VIIb 1) yarlıqadı::
まれて 重大 威 光 ある蘇達製舎那の 町へ 行き たもうた。

soṭancıṭ ädgü 6oṭluṭ yalinliṭ: sudarśan atlay ol baliq 2) -ta: sön ödlärtä
優 良 威 光ある 蘇達製舎那という その 町 には 往昔の 世々に

qilmis buyanlıṭ: sudarśanı atlay ilig bäg 3) bolur ärti::
なした 有徳の 蘇達製舎那 という 国 主 が 居 た。

incip yana ol ödtä: ilig bäg bašin il bodun: irṣi 4) -lär iligi burxan baṭsiniñ:
かく また その 時に 国 主 はじめ 国民は 仙人 王 仏なる 師が

iliñä kälmişin äsidip::

国へ 来たのを聞いて

大 törlüg 5) qanlıṭ süü: uṭrayukälti bu ilkä: odıyuraq alqınṭay biz amü tip
大 種の 王国 軍が 目差して来た この 国へ 明らかに 滅びるだろう 我々は今 と

6) uṭusuz qorqup aymanıṭ::

極めて 恐怖して

alquṭun birgäru känśäsip: alp daram-ka 7) tükällig: artuqraq küclüg
一同に 相談して 勇猛なる法へ 完全なる 非常に 強

kösünlüg iki äranlärig: aldirtin 8) sänaṭqa idtilär::

力なる 二人の男を 下から 偵察へ遣った。

qanlıṭ süü äruṭ mü bilinläṭ: qayu il barir 9) sänaṭlar: qamaṭunnı tükäl
王国の 軍であるか 調べよ どの国へ行くか 調査せよ 一切を 須らく

bälgüläp: qadarılıp baru kälinläṭ::

解明し 急ぎ 行って来るべし。

tiräṣ 10) -gäli kälmişi ċin ärsär: tidıysizın biziñä sözlänär: tirsur 11)
争いに 来たのが 誠 なら 隠さずに 我々に 述べよ 三股叉

śaktılarıṭ anuṭup: tiräsip uṭuru turalim::

短鎗などを 準備し 戦って 対抗しよう。

ilig bägniñ bu yarlıṭ 12) -in: äsidip iki turṭaq äranläṭ: ivinişü tavranışu
国王の この 命令 を 聞いて二人の 間 謀 は 急きよ

ünüp baliqtin: 13) incip bardılar sänaṭqa::

上って 町から このように行った 偵察へ。

anda ötrü ol iki turṭaq äranläṭ: 14) raṭna surya täñri burxan bašin:
そこで その二人の 間 謀 が 宝 日 天 仏 はじめ

amrilmis turulmis arxant tiṭsi VIIa 1) -larlıṭ: ayaṭqa tägimlig bursan
静寂なる 阿羅漢 弟子 達 尊 者 仏僧

quvraṭqa
集團へ

tägdilär ärsär::
到った とき

an'ulayu 2) kálmis ayaŋqa tágimlig kóni tüz tuyuŋlınıń: adın'ıŋ iki qırq
如 来 尊 者 正 等 覺の 素晴らしい 三十二

lakšan 3) -lar: ayaq ivinki sáki on ádgülär üzä: arturu uz itilmis yaratılmis
相 異 種 八十 好 において 通じ 巧妙に 莊嚴された

4) ätözlüg ärdinisin::
身の 宝を

arzuca ärsär yämä qırq kolti bursañ quvraŋ 5) -niń: açılmis linxualıŋ arıŋ
更に また 四十 億 仏僧 集団 の 開いた 蓮華の 聖の

täg tuŋıllıŋ şubralıŋın: alqu ärklig 6) -lärin amirtururup: amilin agrusın
ごとき 光輝を 一切 力 で 鎮めて 安 穩に

oluru ornanu yarlıqamışların 7) kördilär::
坐わり たもうたのを 見た。

kördüktä ök bu irü bälgüläriŋ: köñülläri birtäm süzülüp 8) kirtgünüp:
見たとき この 様 相 を 心は 全く 淨化され 信心し

küçlüg täriń kirtgünć köñülläridin ötgürü: közläridin 9) yaşın aqıtu::
強力深甚の 信心 心の ために 眼から 涙を 流し

raŋna surya burxan başın: aryasañ bursañ 10) quvraŋniń adaqlıŋ iduq qooş
宝 日 仏 はじめ 聖なる僧伽 仏僧 集団の 足にある聖なる一對の

linxularında: ayancañ köñülin 11) yükünü (täginip)-läř::
蓮華に 敬虔 心で 敬礼するに到り

anda basa ol iki turŋaq äränläř: asunuŋı 12) qorqinć tildaŋlıŋ savlarıŋ: atı
そこで 復 その二人の 間 諫が 以前の 恐怖の 因となる 言葉を 世

kötrülmis burxan başın bursañ 13) quvraŋqa adirtlıŋ ötüntilär::
尊 仏 はじめ 仏僧 集団へ 明白に 奏上した。

al alday biligtä 14) uzanmaqlıŋ: alquńı bildäci burxan baŋşı: amtiŋi olar
方 便 智において 修得するもの 一切 知 仏なる師は 只今の 彼らの

savın 15) äşidip: aşaylarıña çarıtlarıña yaraşı nom nomlayu yarlıqadı::
言葉を 聞いて 意業(の) 行へ 相応しい 法を説き たもうた。

VIIb 1) uluş uluŋı burxan baŋşınıń: ol nomlamis nomların äşidip: ol iki
國の大 仏なる師の その 説いた 法を 聞いて その二人の

2) sinaŋci äränläř: uturu incä tip ötüntilär::
間諫 者は そこで 次のごとく 申し上げた

a alqunıŋ 3) umuŋı atı kötrülmis qaŋım: arıŋ iduq sizıŋ bu nomuŋızta
ああ一切の 所望 世 尊 我が父よ 神聖なる あなたの この 法において

şazın 4) -inǰızta adaqtaŋı qodiqi bizni osuŋluŋ qulutlarqa sıŋŋuluq 5)
教義に において 足なる 下なる 我々のごとき 卑賤へ 適

içikgültük: arnaŋı tildaŋı bolu taŋınür ärsär::
従すべき 因縁が 許される なら

saqın'ımız taŋınür 6) 大悲 köñüllüg täŋrim: saaçimızni saqalimızni yülütip
我らが思慮は 到る 大悲 心ある 世尊よ 我らが髪を 鬚を 剃り

tüşürüp: 7) saŋaŋı karaşa yaqşınip toyin törüsindä turup: sapılı taŋingü
落し 僧祇支 袈裟を かけ 比丘の 袈に 留まり 加えられるに到る

8) -lük bursañ quvraŋniń sanıŋa tip::
べく 仏僧 集団の 数へ と。

anda ötrü alqu 9) -nuñ umuʔı ratna surya täñri burxan: amrayu irinçkäyü
 そこで 一切 の 所望 宝 日 天 仏 が 慈しみ 憐れみ

yarlıqamaq 10) üzä olar ikigüni: atayu yarlıqap kal toyın tip: aśnuqı küsüs
 たもう には 彼ら 兩人を 名づけ たもうて 迦羅 比丘 と 以前の 願望

11) -lärin qanțuru yarlıqadı::
 を 満たしたもうた.

olarnıñ yämä saçları saqalları kántün 12) tüšüp: ozaqı kädmiš tonları karaša
 彼らの 髪 髭 は 自ずから 落ち 以前に着ていた 着物は 袈裟

ton bolup: ośıq yarıq 13) qılıç bilikläri pařır çınraγtu šat pariškar boldılar::
 衣となり 兜 鎧 刀 箆などは 鉢 鉢 六 器皿 となった.

14) anda basa ol iki çaqšapat šravni üzä iñniš yañı toyınlar: VIIIa 1)
 そこで 復 その二人の 十戒 聴聞 において作られた 新 比丘は

rațna surya täñri täñrisi 仏 -nün: adaqlıy iduq qooš linxuasında: 2) ayan-
 宝 日 天の天 仏の 足の 聖なる 一對の 蓮華に 敬虔

çaqlıy vazın yūkünüp inçä tip ötüntilär::
 なる 言葉で 敬礼し 次のごとく申し上げた

umuʔsuz biš aźun tınlaγ 3) -larqa umuʔ bolup: 大 qorqınçların avinçların
 所望なき 五 界の 衆生 への 所望 であり 大 應 病どもを

kiřärtü tarγaru yarlıqadaçı: 4) on küçlüg uluʔ yarlıqançuçı köñüllüg qañıma:
 遣ざけ 妨たげ たもうもの 十 力もてる 大 慈悲 心もてる 我が父よ

uqa yarlıqazun biziñ 5) ötügümüzni::
 知り たまえ 我らが 申し上げることを

ilig bāg bašin il bodun: idu täğinti ärti bizni 6) ni sınaγqa: inçgäläyü
 国 主 はじめ 国 民が 遣るに到ったのである 我らを 偵察へ 詳細に

körüp alqunı: irilip yana biziñkä kälınlär 7) lär tip::
 見て 一切を 厭きたら また 我らのところへ帰れ と

alqunuñ umuʔı atı kötrülmis qañim boşuyu yarlıqasar: 8) amtı biz ikigü
 一切の 所望 世 尊 我が父が 許したもうなら 今 我ら 兩人は

sudaršan baliqqa barıp: aγır buyanlıy sudaršanı ilig 9) bašin ilig bodunuʔ
 蘇達製舎那の町へ 行き 重大 有徳の 蘇達製舎那 王 はじめ 国 民を

avi uluʔ ögrünçlig sävinçlig qılsar biz 10) bolu täğingäy mü ärti tip::
 集め 大 喜 樂を なしたいが 許されるだろう か と.

aťı kötrülmis yarlıqadı toyınlara: artuq 11) taplayur män sizläriñ bar-
 世 尊は 宣うた: 比丘よ 大いに 満足す 我れ 汝らの 行

γunuźlarıñ tip: anda ötrü ol iki 12) yañı ayaγqa täğimliglär: aťı kötrülmis
 くことを と そこで その二人の 新 尊 者は 世 尊

üzä boşuyluγın sudaršan 13) baliqqa bardılar::
 の 許可をもって 蘇達製舎那の 町へ 行った.

uluʔ ilig bāg bašin bodun boqun: olar iki 14) oñ toyın bolmišin körüp
 大 国 主 はじめ 人 民は 彼ら二人が 正真の 比丘になったのを 見て

tañlayu muñadu: oturu barıp ol toyın 15) -larqa: oqıtu inçä tip sözlädilär::
 驚 いて 近づいて その 比丘 達へ 叫んで 次のごとく 述べた

nä üçün yültip saçınız VIIIb 1) -larnı saqalınızlarnı: nägülük kädtnizlar
何のために 剃って 髪 を 髻 を 何故 着たのか

boduylu7 tonu7: nägü 2) turur olarnın islari küdüklari: nan incip tüdilmadin
色のついた 衣を 如何であるか 彼らの 仕業は 決して つつみ隠さず

söz 3) -länlär tip::
述べよ と。

ol ödün ol iki ayayqa tägimliglär yämä: on küé 4) -lüg ulu7 yarlıqanécüci
その時に その二人の 新 尊者は 十力あるもの 大 慈悲

köğüllüg: ulu7 ulu7 ra7na surya 天天 5) -si burxannın: otuz iki lak7an säkiz
心あるもの 國の大 宝 日 天の天 仏の 三十二 相 八

on törlüg ayra7lar üzä 6) itilmis yaratılmis ätözlüg ärdinisin:::
十 種(好) で 莊 嚴された 身 宝を

tört qa7a on koltı 7) sanlıy: tüzün bur7an quvra7nı7: tükällig bolmıs
四 層 十 億 数の 善なる 仏僧 集團の 完成した

戒定智 8) -tä ulatı ädgülärin: tüzü tükäl ilig bäg ba7ın buyruqlarqa söz
戒定智 などの善を 須からく 国主 はじめ 大臣へ 述べた、

9) -lädi:: bodun boqun ulatı sudar7anı ilig: bu mundata savlarıy äsidip: 10)
人 民 及び 蘇達製舍那 王は この ことで 言葉を 聞いて

bulmaduqu7 bulmıs täg ögürü7ü sävini7ü: budyıl bälgülüg kän7ä7ü 11) incä
得なかったことを 得た ごとく 喜び合って 明確に 相談して 次のご
tip sözlä7di::
とく話し合った

a7ı kö7rülmi7lärnin yirtinécütä ün 12) -mäkinä: artuqraq alp toz7alı bol7uluq
世 尊 の 世界に 上ることへ 大相 勇猛に舞い上がることができ

ärür: atlıy ya7alıy 13) qa7lılıy yada7ın: alqunı bildäci bur7an ba77ı7qa barlım
る 馬に乗って象に乗って 車に乗って 徒歩で 一切知 仏なる 師へ 行こう

tip: 14) ükü7 tälüm tirini quvra7ı birlä: ö7i-in törlüg äsri7ü IXa 1)
と、 多くの 群集が 共に 色々の 種類 の

tuz7ularıy anutup: ünüp sudar7an balıqtın: ürgürmäklä7ü 2) (天天 -si
供物を 用意し 上って 蘇達製舍那の 町から 上り合って 天の天

bur7anqa) bardılar::
仏へ 行った。

ol (yämä) sudar7anı ilig ba7ın bodun boqun: ulu7 3) yolnu7 o7ırasına
その また 蘇達製舍那 王 はじめ 人 民が 大 道の 真中へ

tägmi7cätä: ulu7 ulu7 (仏) ba7ın 4) ulu7 bur7an quvra7qa tu7dılar ärsär::
到るや否や 國の大 仏 はじめ 大 仏僧 集團へ 出合ったなら

(anda oq kördilär) ra7na surya tä7ri 5) tä7ri7i burxannın: altunlu7 siruqqa
そこで 見た 宝 日 天の 天 仏の 金の 杖に

oq7a7ı körkin mä7i 6) -sin: yüz mi7 kü7n ay tä7rilärtä yirtmi7 yigädmi7
似た 形 を 百 千 日 月 天 から 別れ 広がった

tägirmi 光 7) -lu7 tilgänin::
丸い 光 の 輪を

arxant töyün tüsilarlıy ayaŋqa tägimlig 8) tüzün bursan quvraŋnün: adinçiy
 阿羅漢 比丘 弟子 尊者 善なる 仏僧 集団の 素晴らしい

ïduq éoŋin yalinin 9) amrilmis turulmis tsisin iryapatin::
 聖なる 威光を 静寂なる 止を 威儀を

körmistä ök olar 10) -nün öñin qirtışin: küclüg täriñ kirtgünçläri yügärtü
 見たとき それらの 表情を 強力 深甚の 信心が 上

11) bolup: küsänçig körklä çakir lakšanin yaratıylıy adaqında 12) kösülüp
 好ましい 美しい 輪相で 飾られた 足元に 長々と

suña yaŋip inçä tip ötüntilär::
 平伏し 次のごとく申し上げた:

umuŋsuz inaŋsız 13) bizni osuylur tınlaylarıy: uluŋ yarlıqançuçi köñül 14)
 信心なき 我らのごとき 衆生を 大慈悲 心の

-ünjüz üzä irinçkäyü yarlıqap: onçsuz iray yollarıy irkläp kalü 15) yarlı-
 もとに 慈しみたもうて 堪えがたい遠い 道程を 一勢に 到来した もうた

qamaññız üzä: umuŋumuznuñ ätözi ara ämgänü yarlıqadı IXb 1) mu
 ので 我らが所望の 身が 疲労したもうた のでは

ärki tip::
 と

ratna surya täñri burxan başin: ayaŋqa tägimlig 2) bursan quvraŋqa: amtıqita
 宝 日 天 仏 はじめ 尊者 仏僧 集団へ 居合わせ

ulatı üküš tälim (savlar üzä): aŋır ayançan 3) -liŋin köñül ayıtip::
 た者が 多くの 言葉で 敬虔なる 心(で)述べ

käntün tuyunmis nom qanı başin: kälmiscä 4) bursan quvraŋıy: kätü öziniñ
 自覚 法 王 はじめ 到来の 仏僧 集団を 自身の

ilinçü mäñi qıluluq yimis 5) -likinçä: kälü yarlıqazunlar tip ötünti::
 悦楽となるべき 果樹園へ お出で下さい と 申し上げた.

ilig bäg iki ayaŋ 6) -qa tägimliglärkä inçä tip sözlädi: iriñilär iligi burxan
 國主は 二人の尊者に 次のごとく 述べた: 仙人 王 仏

7) başin bursan quvraŋıy çayşıqa ötünsär män: iyin idärtäçi 8) -läri üküš
 はじめ 仏僧 集団へ 齋食を 申し出るなら我 従う者が 多

tälim bolmaqdin: aš çayşı anuŋalı alp bolıay amtı 9) [bu] savqa nätäğ äm
 い ので 食物齋食を 用意するのに困難であろう 今 この 誓いへ如何なる 手

yöründäk qılurlar ärki tip::
 段を なすのか と.

ol iki ayaŋ 10) -qa tägimlig toyınlar: uturu olarqa inçä tip sözlädilär: 11)
 その二 尊者 比丘は そこで 彼らに 次のごとく 述べた:

uluŋ ilig bäg bu savqa alpırqanmazun: una bu iltä on tünän 12) bayaŋutlar
 大 國主が この誓いへ 専念することなかれ さて この 國には十人の万 長者達が

bar ärürlär::
 存在する

birär tünän bayaŋutlar: biri törtär 13) költi quvraŋqa çayşı anuŋzunlar:
 一 万 長者達の 一人が 各四 億の 集団へ 齋食を 準備すべし

bilgälär bilgäsi burxan başin 14) bursan quvraŋqa: bir yindäm munı tapıy
 賢者の 賢者 仏 はじめ 仏僧 集団へ 常に この 供

uduγ anuṭalim tip::
養を準備しよう と。

Xa 1) amtiqī savlarıγ sudaršanī ilig on tümān bayāγutlar birlā 2) yarplašip:
これなる 誓いを 蘇達製舎那 王は 十人の万 長者 と 誓い合って

ayaγqa tāgimlig iki toyınlarqa incā tip söz 3) -lādilār: aš čayšī tapīγ uduγ
尊 者 二 比丘へ 次のごとく述べた: 食物齋食の 供養を

anutγusīn biz bilālīm: aṭī 4) kötrülmišig bursan quvraγ birlā čayšīqa
準備することを我らは務めよう 世 尊へ 仏僧 集団 と一緒に 齋食を

ötüngüsīn iki 5) ayaγqa tāgimliglār bilzün tip::
申し出ることを二人の 尊 者は 務めるべしと。

anda ötrü iki ayaγqa tāgim 6) -liglār ilig bāgnīn bayāγutnīn ötügin tuṭa:
そこで 二人の 尊 者 は 国 主 長者の 申し出を得て

ratna surya 7) tāñri burxanīγ qırq kolṭi quvraγī birlā: aγir ayaγčan söz 8)
宝 日 天 仏に 四十 億の 集団 と共に 敬虔なる 言葉

kirtgünc köñüllāri üzā: ayaγ tapınγalı ötüntilār::
信心 心 でもって 敬いつつ 供養するべく申し上げた。

9) ikinti kün aš ödi tāgdüktā: iki ayaγqa tāgimliglār ulatī ilig 10) bāg bašin
次の日 食時に 到ったとき 二 尊 者 及び 国 主 はじめ

bayāγutlar: irsilār iligi tāñri burxanīγ bursan 11) quvraγī birlā: idārištürü
長者達は 仙人 王 天 仏を 仏僧 集団 と共に 従わせて

(ayaγčanlıγın utuγup baliqqa kigürdilār)::
敬いながら 案内して 町へ お連れした。

12) aṭī kötrülmiš burxan baγši: altun öñlüg yaruγlarıγ idu yarlıqap: 13)
世 尊 仏なる師は 金 色の 光を 送りたもうて

alqu qamaγ ilig ulušuγ: alasiz bir yaruṭu yašuṭu yarlıqadı::
普 く 国 々を 限なく 一樣に 照らし たもうた。

14) ašanduryalı ötüntāci bayāγutlar: aγlatī taqī bodun boqun birlā 15)
齋食をさせるべく 申し出た 長者達は 多くの 人 民 と

birgärü: ratna surya tāñri burxanīγ bursan quvraγī birlā: Xb 1) adirtliγ
一緒に 宝 日 天 仏を 仏僧 集団 と共に 差別して

körgäli boldılar::
見ることができた。

ilig bāgnīn ävindā: itiglig yaraṭīγ 2) -liγ tāñridām orunta: iyin kākikčā
国 主 の 館 で 装 飾した 神聖な 坐に 順序通り

olγurtup: igšürü igšürü aš ülä 3) -yü tapındilar unduntilār::
坐らせ 少しずつ 食物を 分配し 供養 した。

tapīγ uduγ üzlünécüsindā yana: tarma 4) rača nom qanı tāñri burxan:
供養の 究極において また 法 王 法 王 天 仏が

tapīγlarıña čarıṭlarıña yaršī: 5) tañ tañ nomlarıγ nomlayu yarlıqadı::
礼拝(の) 行に 相応しい 素晴らしい 法を 説き たもうた。

iki ayaγqa tāgimlig toyınlar: 6) ilig bāg bašin on tümān bayāγutlar birlā:
二 尊 者 比丘は 国 主 はじめ 十人の万 長者 と共に

äšidtüklār 7) -indā ök bu nomuγ: ävrilinécisz yanišiz burxan quṭīña köñil
聞いたことにおいて この法を 不 退 転 の 仏 果へ 心を

東
洋
、
学
報

第五十八卷
三三八

öritdilär ::
上らせた。

ウイグル語写本・観音経相応
8) on küclüg ratna surya täñri burxan: olarnıñ ol antaŷ osuŷluŷ 9) burxan
十 力 宝 日 天 仏は 彼らが そのように 仏
quŷıña köñül öritmislärin bilü uqa yarlıqap: ozaqı burxanlar 10) yaŷınca
果へ 心を 上らせたことを 知覚し たもうて 前 仏達に 従って
külçirü: uluŷ quvraŷ arasında incä tip yarlıqadı ::
微笑し 大 集団の 間で 次のごとく宣うた:

11) incıp amtı bu iki toyınlar: ilig bäg başın on tümän bayaŷutlar 12) birlä:
このように今 この 二人の比丘は 国 主 はじめ 十人の万 長者と 共に

iki bir üç asankılarıŷ tozŷurup: ıduq burxan quŷın bulŷay 13) -lar tip ::
二 一 三 無數のものを上らせたので 聖なる 仏 果を 得るでしょう と、

qaltı nätäg ol ödtäki iki ayaŷqa tägimliglä: qan 14) başın on tümän
恰も その時の二 尊者 汗 はじめ 十人の万

bayaŷutlar: qaŷımız täñri täñri burxanqa tapınıp: XIa 1) qamaŷun birgäri
長者が 我らが父 天の天 仏を 祈り 須らく 一緒に

burxan quŷıña alqıs altılar ärsär ::
仏 果への 記を受けた ごとく

ançulayu oq yämä 2) kim ol tip ögdi sözlägül ::
このように また 何 某 と 讃を 唱えるべし、

aşnu ödtäki ol iki ayaŷqa tägimliglä 3) aŷır buyanlıŷ sudarsanı ilig başın
昔の その二 尊者 者 重大 福德ある 蘇達製舍那 王 はじめ

on tümän bayaŷutlar täg ök: 4) atı kötrülmiş başın üç ärdinilärkä tayçunluŷ
十人の万 長者 のごとく 世 尊 はじめ 三 宝へ 大誦の

tapiŷın tapınmaq 5) üzä: alp bolŷuluq burxan quŷıña alqıs alŷuluq käzig
礼拜をすること によって 困難なる 仏 果への 記を受けるべき次第

ärti ::
なり。

6) bu burxan quŷıña alqıs alŷuluq is yämä: budyıl bälgülük bir yindäm :
この 仏 果への 記を 受ける 仕事はまた 明 確なる 一 常(身)

burxan 7) -larta bulŷuluq is bolmaqındın: bu tušta nätäg burxan quŷıña
仏 において 得るべき 仕事 であるので この 時に 丁度 仏 果への

alqıs 8) almadılar ärsär ::
記を 受けなかったなら

qanća qayu ödün kim ol: ilig yiti koltı altı yüz 9) tümän yıllarnıñ ärtmäkinä :
某所 某 時 何某 五十七 億 六 百 万 年の 後に

maytrı burxanlıŷ 千光日天 tigmä 10) saxasıra çandiri miñ yaruŷluŷ kün
弥勒 仏なる 千光日天 即ち 千 光 千 光 日

täñri tilgäni: bu yirtincü yir suv 11) -luŷ ratnadivip atlay ärdinilig oturuŷta
天 輪が この 世 界 の 宝 珠 という 宝 島に

törüyü bälgürü yarlıqasır: 12) ol incıp ödtä qoluta...qalmaqındın maytrı tükäl
出 現 したもうなら そのような 時に ...留まらず 弥勒 完全

bilgä biliglig 13) täñri täñrisi burxanqa tuşup tapişıp: maytrı täñri burxanqa
智 天の天 仏へ 出合って 弥勒 天 仏

ulati 14) arxant toyin tıtsiliy quvraŷına yämä: mundata taqi vikiran taycun
及び 阿羅漢 比丘 弟子の 集団を また ここで 再び 散の 大語

15) -luŷ tapıyın tapınıp udunup: tapıy uduŷ üzlünçüüsindä yana
の 礼拜で 供養し 供養の 究極において また

XIb 1) burxan qutına alqıs alıp: ol alqıştaqiça qatıy lanu tavranu: asankilariy
仏 果への 記を受け その 記にあるように 精 進し 無数(劫)を

2) ärtürüp paramitlariy bütgärip: alp bulŷuluq burxan qutın bulup: özkä
通過して 波羅蜜を 成就し 困 難なる 仏 果を得て 自らへ

8) tägimligcä vaynikı tınlar oŷlanların ozŷurup qutŷarıp: örüg amil nirvan
徳として 善行 衆生の 男子を 解 脱し 平 安 涅槃の

4) -liŷ iduq orunta tınŷuluq uŷrayu soqa avant tildaŷ bulmaqı bolŷay ärti::
聖 地で 安息するべき 特別の 原因 を 得るとなる。

5) tükäl tämur tu q(a)ya çizindim qoın yıl onuné ay biş oŷuzqa saçu baliqta
トケルテミル 都統が尊敬して 書いた 羊 年 第十 月 二十五に 沙州 城で。

6) 今此已後説相応義:

amti mundata inaru bu sudur ärdininiŷ 相応 7) tigmä nom töziñä yaraşı:
今 これより 後 この 経 宝の 相応 即ち 法 性へ 相応しい

bir avdan nomuŷ tanuq tarŷta sözlägütlük käzig ol: 8) anı yämä sözläyü
一 譬喩 法を 引 証し 唱えるべき! 次第 なり それをまた 唱えて

birälim qop süzük kirtgüné köñülin äsidzün tınlazunlar::
やろう 全て 清浄なる 信心 心で 聴 聞すべし。

9) kim ol köni nomluŷ mäxasumudar uluŷ taluŷ ögüzig: köñüllig kölindä
何某 真 法もてる 大海 大海 河を 心ある 潮に

siŷuru içgäri 10) yarlıqamaq üzä: köknün yaŷızniŷ yalanuŷ baŷısi: köni tüz
注入し たもうもの 天 地の 唯一 師 正 等

tuyuŷlı 11) -liŷ sagarı luu qanı::
覺 海 龍 王。

köşıtilmiş kirtü tüzlüg tınlar oŷlanlariniŷ aŷaylar 12) -iña çaritlarına yaraşı:
被覆の 真 性もてる 衆生 子の 意業(の) 行へ 相応しい

körk mänizlär körgitü tayşın mäxayan nomlariy nomlayu 13) yarlıqap:
形 を 示し 大乘 大乘 法を 説き たもうて

kösiklärin tüdŷlärin kiŷarip tarŷarıp: köni kirtü yolqa uduzdaçi XIIa 1)
被 障 を 制 御し 真 実 道へ 導 く

başladaçi::
もの

arqlarınŷ umuŷı: azmişlarniŷ yircisi: alp şakimuni 2) -liŷ baŷısimiz: aŷı
業どもの 所望 迷えるものの 道標 勇猛 釈迦牟尼 の 我らが師 世

kötrülmis qaŷimiz tükäl bilgä biliglig täpři täpři burxan::
尊 我らが父 完全 智 天の天 仏が

3) kim ol öni öni törlüg ärdinlär üzä: önişin säcmä kätlig ärip: 4) ödkä
何某 色々の 種類の 宝 における 特 選 の 町 であり 時に

yaraşı ärgülig turŷuluŷ: üdrülmis säcilmis subum orunluŷ::
相応しい 住 処 選ばれたる 妙 地

5) adil adruŷ ariyı sämäki: ärsilär quvraŷına turŷuluŷ ärip: adinçiy 6)
差別ある 森 林 聖者 集団への 住処であり 特別の

tañisıuq YUSD'N yimisliklari: amrilmis köñüllüglarkä ök ärgülüg: :
 素晴らしい (裕富な?) 果樹園 平安 心もてるものへの 住居

7) ċitri asrı ärdinilärin itilmis: ċinkirtü ayar süzüük buaxanlar uluşı tıtmis: :
 優秀 極上の 宝で 作られた 真実 神聖の 仏 國と 呼ばれた

8) ċit tiginnin yimisliki: ċitavan sañramta yarlıqayur ärti: :
 祇陀 太子の 果樹園 祈禱樂那 衆園で 説いていた.

9) ċay yämä ol ödtä qoluta: ċalınlıy ċoyluq pırasänċi ilig başın balıq içindäki: :
 折しも その 時に 威 光ある 波斯匿 王 はじめ 町中の

10) ċavıqmıs kügülmis bayağutlar amanċlar: ċavlaşıp yıñılıp inċä tip känşäsдилär: :
 有名なる 長 者 貴族が 一勢に集まり 次のごとく相談した

11) amti biziñ ävimiztä 金 kümüs añi barim as azuqta ulatılar: arta taşa 12)
 我らの 家には 金 銀 財宝 食料などが 満ち溢れて

turur kiñ bolmaqıñdin: añi kötrülmis başın burşañ quvrağqa: as ċayşı 13)
 いること 広大であるので 世 尊 はじめ 仏僧 集団へ 食物 畜食を

anuñup tapınсар udunsar biz yämä: arıñi alpırqañmaqımız bolmağay: añır
 準備し 供養すれば 我らは 全く 苦難に遭遇することはないろう 重

uluğ 14) buyanlıy asiylarıñ alquñi barċa biz ök yıymıs tirmis bolğay biz: :
 大 福德ある 益を 須らく 我らは 集積することになるう

XIIb 1) öz küċümüz barındın: üç ärdinilarkä tapınmaqñıñ: öglänü bilinü
 自身の力が 多大故 三宝へ 礼拝の(方法を) 知り覚る

bürsar 2) biz: üküš tälim tañğayusı yoq turur: :
 なら 多くの 迷いが無くなる

amti bu atlağ küülüğ šıravast balıq 3) içindä: qay qay sayu kaza yorip: :
 今 この 有名なる 舍衛の 町 中を 街 街 全て 巡行して

yalğuz yalındıq irinċ ċığay umuğsuz tayaq 4) -siz buşıċi qoltğucılarqa tağı
 身寄りのない 不幸な貧しい依るすべのない 乞食に 到るまで

qolup qoltğulap: nä nägü kiä bulmıs tapmıšlar 5) -in alıp yığıp: anı üzä
 求めて 何でも 彼らの取得したものを 集積し その上で

burxan başıñlıy burşañ quvrağqa: ašin 6) ċayşısın tapınсар udunsar biz: :
 仏 はじめとする 仏僧集団へ 食物 畜食を 供養するなら

arqası qamağ ilig bodunuy: adınċıy 7) buyanlıy asiğta yaratmıs bolup: :
 須らく 国民を 素晴らしい 福德の 益に なすこととなり

iltäki uluštağı üç törlüg ada 8) -lar boğup amrilip: inċip yana közünür
 國にある 三種の 災難を 制し 平安となり かく また 現

azunta bodun boqun boqun inċä mäñlig 9) bolğuluğ buyanlarıñ alıp: kinindä
 世で 人 民 がこのように 幸福になる 徳を 得て 後に

tüzgärinċesiz yig üstünki burxan quñın 10) bulğuluğ avant tıldağ qılсар biz: :
 最上 極上の 仏 果を 得るべき 原因を なすなら

bu timin tañırqayuluğ sav ärür: tip 11) munċulayu känşäsip: :
 これは正に 素晴らしい 誓いなり と このように 相談して

šıravast balıq içindä qay qay sayu mañjinta 12) mañjirandılar: munda kin
 舍衛の町 中を 街 街 全て 歩きまわった. この 後

yitinċ: kün pırasänċi ilig anaatapındiki 13) bayağut başın baş başıñ buyluğlar
 第七 日は 波斯匿 王 給孤独 長者 はじめ 主だった 大臣

atlağ (yüzü)-lüğ amanċlar birlä: 14) arqa qamağ ilinğ bodunnuğ taplağır
 有名なる 極上の 貴族と共に 全ての 国民の 満願

ärür::

なり。

alqu qamaq äv äv sayu qol 15) -up qoltuɣulap: alqunı bildäci burxan
須らく 家々全て 求 め て 一切 知 仏

東
洋

başın: ayaɣqa tägimlig bursan XIIIa 1) quvraɣqa: ašin çayšisın tapınuluɣ
はじめ 尊者 仏僧 集団へ 食物 齋食で 供

学
報

udunɣuluɣ::

養するべし

qaylarıɣ bältir 2) -lärig arıtıp sipirip: qıylarıɣ yamlarıɣ kiṭarip tarɣarıp:
街 辻 を 清掃し 糞 芥を 取り払い

yıdlarıɣ 3) yıparlarıɣ suvlarıɣ yiriñä saçıp: öz kücünjüzlär yitmişincä nä 4)
香 薫 水を 地に 撒き 自 力の 及ぶ限り 懸

nägü kiä ärsär anuṭunlar simäkläñlär tip::

命 に 準 備すべし と

bu savlarıɣ äsidip širavast 5) balıq icındäki: bodun boqun ulatı irinç çıɣay
この 言葉を 聞いて 舍衛の町 中の 人民 など 不幸な貧しい

kişilär: buşıci qoltıuçı 6) -larqa tägi qalmadın: bulmıs tapmıs äd tavar aɣı
人々 乞 食 に到るまで 残らず 取得した 財産 財

barım ton kädım yivig 7) tizigtä ulatılarıɣ öz öz 力-läriñä tängärip anudılär
宝 衣 服 財 物 などを 各各の力 に 応じて 準

simäk 8) -lädilär::

備した。

anda ötrü pırasänci ilig başın: atlaɣ yüüzlüg bäg isi 9) bodun boqun birlä:
そこで 波斯匿 王 はじめ 有名なる 官吏が 人民 と 共に

amtıqı ol ol tavarlarıɣ islätip yunlap: atı 10) at kötrülmıs başın bursan
これなる それぞれの 財を 使用して 世 尊 はじめとする 仏僧

quvraɣqa tapındılar unduntılar::

集団へ 供養した。

tapıɣ 11) uduɣ isi ärtip yunɣu suv yorıtu tükätüktä: taplaɣlarınca öñi 12)
供 養の 行事が終り 洗浄 水を 使い終えたとき 満願まで それ

öñi äsriñü orunlarta: tap-tau tişi täg qurlarınca käzigläriñä 13) olurup:
ぞれ 各 地で 塔頭の弟子のごとく 順序 に 従って 坐して

tapları sävigläri boldı atı kötrülmıştın nom äsidgülük::

切望が かなった 世 尊から法を聞くべき。

↑

14) baɣšimiz qañimiz täñri burxan: pırasänci ilig anaṭapıntaki bayaɣut başın:
我らが師なる 父なる 天 仏は 波斯匿 王 給孤独 長者 はじめ

balıq icındäki baş baştın: barı bolɣu bodunnuñ boqunnuñ nom äsidgäli
町 中の 主たる 全ての 民 衆 が 法を聞く

XIIIb 1) uɣrap olurmışların körtü yarlıqap::

ために 坐ったのを見 たもうて

aşaylarıña çarıtlarıña yaraşı: 2) arıɣ nomlarıɣ nomlayu yarlıqadı: anda ötrü
意業(の) 行へ 相応しい 聖 法を 説き たもうた。 そこで

ilig bäg başın bodun boqun: 3) atı kötrülmıştın nom äsidip süzümäklärindin
國 主 はじめ 人民は 世尊から 法を 聞いて 清淨する

第
五
十
八
卷

二
三
四

ötgürü: :
ために

ウイグル語写本・観音経相応

olurmıs orunlar 4) -indın örü turup: uluş uluŷ burxan baŷsinin adaqında
坐った 所 から 立ち上り 国の大 仏なる 師の 足元に

soŋ 5) yaŷıp: uluŷqı T''''YĞ qut küsüs öritü: uturu incä tip söz 6)
遂に 平伏し 大なる (解脱の?) 福望を 上らせ そこで 次のごとく述べ

-lädilär: :
た

ančaqa-tägi turmaŷay biz: atı kötrülmıs täŋrim siznitin: 7) alquni bildäci
斯くまで 立ち上るまい: 世 尊 天 あなたから 一切 知の

burxan boluŷqa: adirtliŷ viakrüt alqıs almaqınca tip: :
仏に 成るための 差別ある 記 別を 受けるまで と。

8) on küclüg täŋri burxan: ol incip ilig bāg başin bāglärnin buyruŷ 9)
十 力 天 仏は そのように 国 主 はじめ 官吏 大臣

ların: uluŷ tuytmaq burxan qutıŷa: uruŷ äkmişlärin bilü uŷa 10) yarlıqap: :
が 大 覺 の 仏 果へ 種を蒔いたのを 知り たもうて

qolusuz ädgülüg burxan qutıŷa alqıs birgü täki: qop törlüg 11)irü bālgüläriŷ
無効 善 の 仏 果への 授 記 にある 全 種の 印 相 を

körgitü yarlıqap: 空王如来 tigmä burxan bolŷay siz 12) -lär tip: qutluŷ
示したもうて 空王如来 という 仏に なるだろう放ら と 福

qutluŷ burxan qutıŷa viakrüt alqıs birü yarlıqadı: :
徳の 仏 果への 記 別 を 授けたもうた。

13) qaltı nätäg (pirasänci ilig başin) širavast baliq icindäki bodun boqun:
恰 も 波斯匪 王 はじめ 舍衛の町 中の 人 民

atliŷ yüzlüg bāg 14) isi birlä birgärü yiŷilişip tirilişip: atı kötrümıs başin
有名なる 官 吏が 一緒に 集合し 世 尊 はじめ

aryasan XIVa 1) burşan quvraŷqa: aşin [•] äa[y]şisin tapinip udunup:
聖なる僧加 仏僧 集団へ 食物 齋食でもって 供養し

adaqında 2) yana nom äşidip burxan qutıŷa alqıs aldılar ärsär: :
畢竟に また 法を聞き 仏 果への 記を 受けたごとく

ançulay uq 3) oq yämä kim ol incilü barmıs ilig uluşuŷ: irtäki täg itgükä
このように また 何某 散々になって行つた 国 を以前のごとく統治することへの

4) oŷraŷliŷ: isilü turur boqunuŷ boqunuŷ: idän ikälägükä taplayliŷ: :
本願 拡散している 人 民を 全て 再生することへの 満願

5) burxan başin üç ärdinilärtä: buzulmaz artamaz kirtgünclüg: 6) buyanliŷ
仏 はじめ 三 宝において 壞 腐しない 信心 有徳の

işläriŷ işlägü tuşında: buduqmıs bilgin boş taş iliglig: :
仕事を する 時に 成就した 知を 空 王

7) inis ödtä ärsär yämä: irtäki täg ök ilig uluşuŷ ikäläyü: 8) (ic taş kisiläriŷ
未来にあれども 以前のごとく 国 を 再生し 内外の人々を

timädin): intkisin yaraŷın itä turdaçi: :
問わずに 下なる 仕事を 修めているもの

9) öz ätözlärinin ämgängüsin tutmatın: (üküs ilniŷ bodunnuŷ) işin qıldıçi:
自身の 苦痛を 思わずに 多 国 民 の 仕事をなすもの

庄垣内

第五十八卷

三三三

10) ävlärinñ intkisin sipri körmätin: artamış ämgänmiş bodunnuñ ämgäklärin
家々の 下なるものを追い出してみずに 腐った 病んだ 民の 苦痛を

isdäci::
滅じるもの

11) qoçu uluśnuñ qutı qıvı: baliqnıñ uluśnuñ baṭ başqa basuruyları 12)
高昌 國の 幸福 町の 國の 無用の演場の 制庄
iliniñ bodunnuñ itigläri yaratıyları bolmış: ilci yalavaç taruxan başxañan 13)
国民の 莊嚴は 完成した: 使者 タルハン バシユハガン

başın: arqa qamaq qoçu uluś içindäki bäg isi başın bodun boquñ birlä
はじめ 全 高昌 國中の 官吏はじめ 人民が

birgäri::
一緒に

14) qutsiramış artamış ilig uluśuṭ qutatturğalı: bodunuṭ boquñuṭ yanduru
不幸になった 腐った 國を 幸福にすべく 人民を 更に

yana 15) buyanlandurğalı: öñi 又 simtä sañramta ärdäci 仏 başın burşañ
福德にすべく 別の又 四摩 衆園にいる 仏はじめ 仏僧

quvraqıy XIVb 1) ötünüp savlap kälürüp: (bu) bodimandallıy orunta
集団を 申奏し 来させて この 道場の地に

七日 -ünbärü: yig adruṭ tapıy 2) uduylar üzä tapınıp udunup::
七日 以来 良好なる 供養 で 供養し

üzlünçütä yana ätöz quṭrulmaq küsüs 3) öritü: bizni osuṭluṭ partakäcan
畢竟に また 解脱の 望みを 上らせ、 我々のごとき 凡夫

toyiniñ burxanlar qolusınca saqınu: 4) ayayu aṭırlayı nomqa ötünüp: arıy
比丘を 仏 時にまで 考慮してもらい、 尊敬して 法を申し出て 聖なる

maxayan bu sudur ärdiniñ nomlaṭmaq üzä: 5) aśnu sözläguçi śıravast baliq
大乘の この 経 宝を説いていただいで 前 述の 舍衛の町

taqi pırasänci qan başın bäglär täg ök: alqu 6) -ni bildäci bolıuqa alqıs
の 波斯匿 王を 頭とする貴族のごとく 一切 知と なれるものへ 記を

alıuluṭ käzig ärti::
受けるべき 次第なり。

bir 者 時 -nüñ qolunuñ 7) iniś öpdikiñä: ikinti ärsär 仏 -siz ödkä qoluqa
一 は 未 來 の 濁惡世へ 第二は 無仏 時へ

tuśuśmaq üzä: 8) 三 -ünç 者 nizvanı qılınçniñ aṭırına: bu tušta 仏 quṭıña
遭遇することに 第三は 煩惱 行為の 苦痛へ この時に 仏 果への

alqıs alu 9) umadılar ärsär::
記を受けることができなかつたら

qançan qayu ödün kim ol: tuṭit täñri yirindäki tört 千 10) -lıy öz yas
某所 某 時 何某 兜率 天 の地なる 四 千 歳を

tükämäkindin: tüzin maytri burxanlıy udumbara linxua bu 世界 11) -lüğ
完遂することから 善なる 弥勒 仏の 優曇 華が この 世界の

parıçatük arıyta törüyü bälgürä yarlıqasar: ol uṭurta yämä 12) sizlär maytri
彼岸生聖に 出現したもうなら そのときに また 汝らは 弥勒

仏 başın 并 -lar arxantlar quvraqıña munı täg ök tayçuluṭ 13) tapıyın tapınıp
仏はじめ 菩薩 阿羅漢 集団へ このように 大講の 礼拜で 供

udunup: bu qılmiş buyanlarınñ kiñ täriñ yöriğin anca tuś 14) -ta (açuq
養し この なした 徳の 広い 深い 義を そのような時に 明

adürurluŷ) äšidip ::

確に 聞いて

maytri 仏 -liŷ paramart ċinkirtü baŷšini bu oq sudur ärdinig XV 1) 弥勒 仏の 波羅末陀 真実 師に この 経 宝 を

nomlatʻrali ötüniŷ : tüzgäriñsiz yig üstünki 仏 quŷıŷa alqış alıp : 2) ol 説いて下さるよう申し出て 最高 至高の 仏 果への 記を受け その

alqıştaŷıca qatıŷlanu tavrano asankılarıŷ ärtürüp parmütleriŷ bütä 3) kärip : 記にあるごとく 精進し 無数劫を 過ぎて 波羅蜜を 大いに 広げ

buyanli bilgä biligli yivigliŷig tolyurup toşurup ::

徳と 智 との資糧を 満たして

4) 等覚妙覚 tigmä 二 törlüg tuş käziŷlärdin ärtip käcip : tüpkärmäk 5) atlaŷ 等覚妙覚 即ち 二 種の 相対する次第から 過ぎ去り 覚悟する という

tušta tüzü köni tuymaq burxan quŷın bulup : kälämädik ödlärniŷ 6) uči 時に 一切を 正しく 悟る 仏 果を 得て 未来の 際

qidiŷi tükäkinćäkä-ŷagi : tuŷči ulalıp üzülmädin käsilmädin mäŷün 7) ärip :: 限の 果にまで 存続し 壞れず 切れず 永劫であり

alqu tinlaŷlarqa asiŷ tusu qılu 大自在天宮 tigmä 8) uluŷ ärkünmäkkä 一切衆生へ 利益を なし 大自在天宮 即ち 大 自在へ

täggülük : aŷšvarastan atlaŷ orunta : abamuluŷ 9) ödün ornaşmaqları bolŷay 到る 自在処 という 地に 永遠 に 住み合うことになるで

ärti ::
あろう。

善哉善哉塗土 10) qayu ma 大乘 sudurlarqa sözläsär : qasinćiŷ taŷısuq uz どこでも 大乘 経において 唱えるなら 大相 素晴らしい 妙と

bolur ::
なる。

11) 観音経 sudurnuŷ 相応是
経の

(京都大学文学部助手)

解題註

- (1) Aurel Stein "Serindia" vol. II, 1921, Oxford, p. 925.
- (2) XVIa は白紙, XVb と XVIIb には奥書 (cf. p. 03), また丁数のない1枚は法華経に関する断片である。
- (3) Stein, p. 925, 羽田亨「回鶻訳本安慧の俱舍論実義疏」『羽田博士史学論文集』下 1958, pp. 148~182.
- (4) cf. 註(3)。
- (5) Şinasi Tekin "The Uigur Translation of Abhidharma-koşa-bhāşya-ṭikā tattvārtha-nāma" 1970, New York, pp. IX~X.
- (6) 漢訳長阿含経には十二部経の一として相応経の名がみられる, 国訳一切経の註によればこれはパーリ語の *itivuttaka* (skr. *itivṛttaka*) 即ち「本事」に相

当すると記されている。*itiṛṭṭaka* と *avadāna* は本来的にはもちろん異った性格の経であるが、このウイグル文中の相応が本来 *itiṛṭṭaka* を意味するものであり、後にウイグル語において *avadāna* と同一視されるようになったと考えることもできる。cf. 『大正大藏經』第一卷七四頁、『国訳一切経』阿含部七、二三七頁。

- (7) 『妙法蓮華經』第七卷「觀世音菩薩普門品第二十五」を略して「觀音經」というのが普通である。ウイグル文の「觀音經」には次のようなものがある；W. Radloff, “*Kuan-ṣi-im Pusar*” 1911, St.-Petersburg; F.W.K. Müller, ‘Uiguri-*ca*’ II, 1910, “APA W”, pp. 14~20; 羽田亨「回鶻文法華經普門品の断片」『羽田博士史学論文集』下, pp. 143~147。
- (8) 但し、第二篇には「觀音經」は現われずそのかわりに「三宝への大誦の礼拝」をすることによって授記されると説かれている。
- (9) cf. 註(3)(5)。
- (10) Tekin は *Tukel Temurtu Qya* とし、その全体を人名と解釈している、一方羽田博士は *tämür tu* の *tu* については不明とされ、*qya* は diminutive と考えられた。しかし筆者は *ĠY* は /q(a)ya/ と読んで、*qay-* “to bend in respect” の gerund と考えたい。また /tu/ は *tutuŋ* 「都統」の略号と判断した (cf. 山田信夫「ウイグル文貸借契約書の書式」『大阪大学文学部紀要XI』, 1965, p. 170)。更に羽田博士は *ġizindim* を「拔萃せり」と訳されたが、*koman* 方言 *kıpçak* 方言にみられる *ġiz-* ‘to write’ の reflexive と考えた。
- (11) このような仏典例として Or. 8212-108 を挙げるができる。
- (12) /*taruxan*/ は称号として突厥碑文などにもみられるが、ここに現われる形式はむしろ元朝時代に使用された「荅剌罕」という称号に該当するものと考えたい。一方 /*bašxaŋan*/ の書写はあいまいで、他にも /*barsxaŋan*/ あるいは /*basqaq*/ などと読むことができる。ここでは写本全体の筆跡から最も確率の高い形式を選んだ。
- (13) ETS にはサンスクリット原典をウイグル詩に改変したことを示していると考えられる箇所がみられる：
- arduq tering bilge bilig paramit-ka*
ayaġu-luġ nagarçuni baqşı öze
arya bas-ça yarađımıŝ nırvikalpa
atlıġ ögdig bıraty-a ŝiri taqşut koşđum (p. 160)
- 「深甚智の波羅蜜のために、尊 *Nāgārjuna* 師が *āryabhaṣā* 語 (サンスクリット) で作成した *Nırvikalpa* という偈を我れ *Pratyaya-Śri* が詩に作った。」
- (14) この単語は元来 *at* 「名」+ *liŋ* (denominal adjective) から構成されている

が、本仏典では「…という」の意義に使用される場合には常に "TLǰ と表記される、これはマニ教文献にみられるように i が低母音化して既に [ä] または [ə] の音価に変化固定した事実を示していると考えられる。

- (15) この接尾辞は元朝時代に書かれた Or. 8212-109 にも現われる。cf. 拙稿「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212(109) について」『東洋学報』第56巻1号, 1974, p. 052。
- (16) A. von Gabain "Alttürkische Grammatik," 1950, Leipzig, p. 94.
- (17) chinese に関しては B. Karlgren "Analytic Dictionary of Chinese and Sino-japanese," 1923, Paris の ancient chinese (但し中古漢語) を使用した。
- (18) トカラ語に関しては W. Thomas "Tocharisches Elementarbuch" II, 1964, Heidelberg; E. Sieg und W. Siegling "Tocharische Sprachreste, Sprache B" 1949, Göttingen; R. Pouch "Institutiones Linguae Tocharicae," Pars I, 1955, Praha を使用した。
- (19) cf. ET§ pp. 63~161; 拙稿「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212-108 について」『東洋学報』第57巻1・2号, 1976, pp. 017~035, なお -109については拙稿 註(15) pp. 044~057。
- (20) 版本については cf. P. Zieme 'Zur buddhistischen Stabreimdichtung der alten Uiguren' 1975, "AOH" 29, pp. 187~211; G. Hazai 'Ein buddhistisches Gedicht der Berliner Turfan-Sammlung' 1970, "AOH" pp. 1~21.

テ ク ス ト 註

Ia

- 5) /čambudivip/ <skr. *jambudvīpa* 「瞻部州」。
- 6) /kanānabumi/ <skr. *kāñcana-bhūmi* 'gold'- 'the earth, ground' (Monier).
- 8) /adipatipal/ <skr. *adhipatiphala* 「増上果」(Soothill) 力=küć 化=ävilü-.
- 9) /śāy/ <skr. *śāya* 「意業」(織田) /čarit/ <skr. *carita* 「行」(MP) /tsi/ <chin. 止 /iriypat/ <skr. *iryāpatha* 「威儀」(MP) /suvluŋ/ の /suv/ は頭韻を調えるために čor にかえて使用された可能性もある。cf. /čorluŋ yalīnliŋ/ 「威光ある」(IXa-8)。
- 10) /sukuśmaćudi/ <skr. *sukṣma-cūḍa* 'minute, small, fine' (Monier)— 'Small, Petty' (Edgerton) /supirabi/ <skr. *su-prabhā* 撰集百緣経には「善光」として現われる(赤沼)。
- 11) 福=buyan <skr. *puṇya*。
- 13) /avtīapakī/ <?skr. *avajñāpaka avajñā* 'contempt, disesteem, disrespect' (Monier)。
- 14) /anītyat/ <skr. *anītyatā* 「無常」(MP)。

Ib

- 1) 子=oylan 大=uluγ.
- 2) /ürusuz/= /u-/ 'to be able' + /γu/ (deverbal noun) + /suz/ (privative) 直訳すれば「可能無き」となるがここでは「非常に」「極度に」の意義に相当すると考えられる, cf. VIb-6.
- 4) /uduγçi/= /uduγ/ 'obedience, respectful' + /çi/ (person).
- 6) 人=kiši.
- 7) /uuntuçi/= /uuntu/ + /çi/ (person) この語幹がトルコ語か否かは不明である, しかし可能性として次の2つを推定できる: ①oumÿ 'der Seufzer, das Geächze' (Radloff *Wb.*) ②盥 (anc. chin. 'uân) + /tu/ (Mong. denominative) 何れにしてもこの単語は「乞食」の意義を表わすものと考えられる, cf. /bušici qolγuçi/ 「乞食」(XIIIa-5).
- 8) /känšäs/= /känäs-/ + /s/ (reciprocal) 普通は künäs- の形式をとる (<kenäs-).
- 13) /xua yavišγu/ /xua/ < chin. 華, cf. xwa yavišγu 「華鬘」 F.W.K. Müller 'Uigurica' II "APA W" 1910, p. 40.

IIa

- 1) /kušalamul/ < skr. *kuśalamūla* 「善根」(Soothill).
- 2) /kišimangari/ < skr. *kṣemamāṅkara* 「作樂」(MP) 撰集百緣経には「差摩」として現われる(赤沼) 天天=tänri täñri.
- 4) /sukumari/ < skr. *su-kumāra* 「善」—「童子」(MP) /uluγ qia/ は uluγ oγlan qia 「長男」の短縮形と推定できる。/qia/ は diminutive.
- 5) /surt/ < ? skr. *sārata* 'well disposed towards, compassionate, tender' (Monier).
- 7) 天仏=tänri burxan /tütsi/ < chin. 弟子。
- 8) 三=üc /bičan/ < skr. *pūjana* 「供養」(MP), /tägzig/= /tägiz-/ 'to revolve' + /ig/ (deverbal noun).
- 12) /puruś/ < skr. *puruṣa* 「人」 /bamdinī/ < skr. *bandhana* 'binding, fettering tying' (Monier) /puruślar bamdinī/ は仏の異名であるが, *Puruṣadamyaśārathi* 「調御丈夫」(MP) に相当するものと考えてよからう。
- 14) 信心=kirtgüné (üg).
- 15) /čarītasuki/ < skr. *carita-sukha sukha* 'pleasant, happy' (Monier).
- 16) /viakrüt/ < toch. B *vyākariit* < ? skr. *vyākṛta* (cf. p. 17), 一方 Müller はこの単語について, 蒙古語でサンスクリットの *vyākaraṇa* を誤読した形式 *vivanggirit* から入ったと説明している('Uigurica' II, p. 39), しかしこれは誤りであろう, なお「記別」を表わすウイグル語の単語は /alqış/ で

ある、この単語は本来 'praise' を意味する。

IIb

- 7) /aryasaŋ/ <skr. *āryasaṅgha* /čayśi/ <chin. 齋食「古来僧に食を供するを齋という」(望月 p. 1396).
- 10)~12) /qorqinčqa...uduzdači/ は「普門品第二十五」中の次の文章に相当する：「百千万億衆生受諸苦惱聞是觀世音菩薩一心稱名觀世音菩薩即時觀其音声皆得解脫」(『大正新修大藏經』卷第九, p. 56), /quansüim pusar/ <chin. 觀世音菩薩 /qonimki/ <chin. 觀音經, 觀を ČUN あるいは QUN とウイグル文字で転写した例は qonsüim bodistv として 'Hazai' (cf. 解題註20) = の中にもみられる, 心 = köñül 苦 = ämgäk.
- 14) /ödnün qolunuñ inişindin/ /iniş/ = /in-/ 'to descend' + /iş/ (deverbal noun), cf. öd iniş = 'gelecek zaman' 「未来」(ETS p. 161).
- 17) 法 = nom.

IIIa

- 2) /vişay/ <skr. *vişaya* (= /atqaʃ/).
- 3) /atmiş/ = /at-/ 'to throw, to shoot' + /miş/ (past), 世界 = yirtinčü.
- 4) 品 = bölük.
- 5) /asanki/ <skr. *asaṅkhyā* /maxayan/ <skr. *mahāyāna*.
- 6) /paramit/ <skr. *pāramitā* /vayniki/ <skr. *vainayika* 'relating to moral conduct or discipline or good behavior' (Monier).
- 7) /adaq soñinda/ は直訳すると「足の後ろに」となるがここでは「畢竟に」の訳語が当る。
- 8) /padma kişara galb/ <skr. *padma keşara garbha keşara* 「鷄薩羅(宝名)」(織田) /galb/ は /kalp/ と読んで skr. *kalpa* 「劫」に当てたいところだが意義の上からは skr. *garbha* 「胎」(Soothill) の方が適当と考えられる。
- 9) /aiñšvarastan/ <skr. *aiśvara-sthāna* 'mighty, powerful' - 'place of standing or staying' (Monier).
- 11) /padma kişara kavşabavan/ <skr. *padma keşara kauśabhavana, kauśabhavana* の *bhavana* は 'a place of abode, home, place', *kauśa* は 'silken' 'made of kuśa grass', *kauśika* 'a king of seed' (Monier), *koşa* 「藏」(織田), cf. 'Zieme' (cf. 解題註20) kavşik <skr. *kauśika* p. 203.
- 13) /uʔrayu soqa/ この熟語に対して 'Hazai' は 'besonders und genau' の訳語を当てている, p. 5.

VIa

- 4) /čakiravrt/ <skr. *cakravartin* /qan/ = *rāja*.

- 5) /čaramabaviki/ <skr. *carama-bhavika* 「一生補処」(MP) 并は菩薩の略字 (=bodistv), /cambu/ <skr. *jambu* 「閻浮」(織田) /ülänlig/ = 'mit Gras bewachsen, grasreich' (Radloff *Wb.*) /čambušant/ <skr. *jambuṣaṇḍa* 「瞻部林」(MP₂).
- 6) 金 = altun.
- 7) /qaya/ <skr. *kāya* /maṇal/ <skr. *maṅgala*.
- 8) /ratna surya/ <skr. *ratna-sūrya sūrya* 「日天子, 宝光天子」一観世音菩薩の变化身にして太陽の中に住す (織田 p. 1332).
- 10) 仏 = /burxan/, /iztā-yü/ = /iztā-/ 'to seek' + /yü/ (gerund) 普通は istä- の形式をとる。
- 14) /turuq/ は 'place of residence' の意義をもつが, 'Türkische Turfan-texte' IX には arīṅ turuṅ で 'rein' の意義を表わす例がみられる。A. von Gabain W. Winter, "ADAW" 1956 p. 18, /arxant/ <skr. arhant /yula/ は YUL と表記されているので yol 「道」とも読めるが, ここでは YUL' の誤りと考えたい。
- 15) /sudarśan/ <skr. *sudarśana* 「蘇達梨舍那, 善見, 善現」(織田)。

VIIb

- 3) /bašin/ は /baš/ 「頭」に /in/ (instrumental) のついた形式と考えられるがここでは「…をはじめ」「…を頭とする」「…率いる」の意義で使用されている, /irši/ <skr. *ṛṣi*.
- 6) /daram-ka/ 本来は -qa (dative) となるところ, /daram/ <skr. *dharma*.
- 7) /aldirtin/ = /al/ 'нш' + /dir/ (< mong. dative-locative dur) + /tin/ (ablative).
- 10) /tidiṣizän/ = /tidiṣ/ 'hindrance' + /siz/ (privative) + /in/ (instrumental) /tiršur/ <skr. *triśūla* 「三股叉」(MP).
- 11) /šakti/ <skr. *śakti* 「短鎗」(MP).

VIIa

- 2) /lakšan/ <skr. *lakṣaṇa* 「相」(MP).
- 5) /šubra/ <skr. *śubhra* 'radiant, shining, beautiful' (Monier).

VIIb

- 4) /qulut/ = /qul/ 'a(male) slave' + /ut/ (< mong. plural suffix -ud).
- 5) /arnaṅi/ = /ar-/ 'to deceive, trick' + /n/ (reflexive) + /aṅ/ (deverbal noun) + /i/ (3. pers. possessive).
- 6) 大悲 = uluṅ yarlıqančuṅi cf. VIIIa-4.
- 7) /saṅatī/ <skr. *saṅghāṭi* 「僧祇支」(織田) /karaśa/ <? skr. *kāṣāya*, <? toch. *kāsāri*, <? sogd. *karazakh* sogd. の形式は ETŞ p. 357 より。

- 10) /kal/<skr. *kāla* 'black, of a dark colour' (Monier) 比丘名「黒者, 黒氏」(赤沼)。
- 13) /bilik/= 'sadaq, ok ve yay kuburu' 「箴, 矢や弓のケース」・“Tarama Sözlüğü” I, Ankara, 1963, p. 572, /patır/<skr. *pātra* 「鉢」(MP) /çinratʁu/ この単語は ‘La version ouigure de l’histoire des princes Kalyānamkara et Pāpamkara’ の中に çinratʁu の形式で現われる, Paul Pelliot “*T’oung Pao*” XV, 1914, /sat pariškar/<skr. *ṣaṭ pariṣkāra* 「六器皿」(MP)。
- 14) /caqšapat/<skr. *śikṣāpada* 「十戒」(Soothill) /śravni/<skr. *śravaṇa* 「聴聞」(MP)。

VIIIa

- 2) /vaz/<skr. *vaca* ‘speaking, talking’ (Monier)。
- 6) /irilip/= /ir-/ ‘to mope, to annoy’ + /il/ (passive) + /ip/ (gerund), /ni/ (2nd. pers. pl. acc.) 及び 7) の /lär/ (plural) は重複しているが, これは音節数を調えるために挿入されたと考えられる: 8-13-9-13 (但し, /iligi …tip/)。

VIIIb

- 6) /kolti/ <skr. *koṭi* 「億」(MP)。
- 7) 戒=skr. *śīla* 定=skr. *saṃādhi* 智=skr. *jñāna* (Soothill) 智はここではウイグル語 *bilgä bilig* と読んだと考えられるが他の2つをどう読んだかはわからない。
- 10) /budʁil/ <skr. *pudgala* ‘beautiful, lovely’ (Monier)。

IXa

- 5) /altunluʁ siriq/ /siriq/ ‘pole’ 「金杖」(織田)。
- 6) /yirt-/ ‘to tear, to pull to pieces’ /yigäd-/ ‘to get better, to succeed’ 光=yaluʁ。
- 11) /çakir/<skr. *cakra*。
- 14) /ončsuz/ は UCSUZ *učsuz* ‘boundless’ の書き誤りである可能性もある。

IXb

- 11) /on tümän bayaʁutlar/ は「十万長者達」とも訳せるが, 12) の /birär tümän bayaʁutlar…anutzunlar/ から判断すると「十人の万長者」の方が適当と考えられる: (十) + (四億) = (四十億一即ち僧伽の総員数)。

Xa

- 2) /yarplašip/= /yarp/ ‘firm, solid’ + /la-/ (denominal verb) + /s/ (reciprocal) + /p/ (gerund)。

- 7) /ayaṛcaṅ/ は /ayaṛ/ ‘profound, respect’ に /-caṅ/ のついた形式と推定されるが、/-caṅ/ は本来 deverbial noun の機能をもつ接尾辞である、もしこの単語表記が誤りでないならば、おそらく /ayan-caṅ/ ‘reverent’ からの類推による形式であろう。

Xb

- 2) /igśürü/= /igśü-/ (<ägśü-‘diminish’)+/r/ (deverbial verb)+/ü/ (gerund) か？
- 3) /tarma raća/<skr. *dharma-rāja*=/nom qan/.
- 10) /kūlcirü/ 「微笑んで」cf. 「授記の形式は仏先づ微笑を現じ面前より光を放ちて……次に上座の弟子微笑の因縁を問ひ之に発端して記別を与ふるを普通とす」(望月 p. 2435)。

XIa

- 4) /taycuṅ/<chin. 大誦。
- 8) 「五十七億六百万年」とあるが、弥勒の下生成仏は兜率天の四千歳即ち人間の五十七億六千万年の後に当るので、この六百というのは本来六千と書くべきところである(cf. 望月 p. 4816) /maytri/<skr. *maitreya*.
- 10) /saxasira čandiri/<skr. *sahasra candra* ‘a thousand’-‘glittering, shining’ (Monier).
- 11) /ratnadivip/<skr. *ratnadvīpa* 「宝渚」(Soothill).
- 14) /vikiran/<skr. *vikiraṇa* 「散」(MP) 散=「定に対する語、心の散乱して一境に止住せざるを云ふ」(織田 p. 603) cf. 散心誦法華(織田)。

XIb

- 9) /maxasumudar/<skr. *mahā-samudra* ‘great sea’ (Monier).
- 11) /sagarī luu qan/<skr. *sāgara* ‘an ocean’ (Monier), <chin. 竜, 即ち skr.+chin.+uig.
- 12) /tayšin maxayan/<chin. 大乘, <skr. *mahāyāna*, 即ち chin.=skr.

XIIa

- 1) /arq/ は ”RĠ’ /arqa/ ‘множество’ の誤まりの可能性もある、/sakimuni/<skr. *śākyamuni* 「釈迦牟尼」(Soothill).
- 4) /turγuluγ/= /tur-/ ‘to stand, to continue’+/r/ (deverbial noun)+/luγ/ (denominal noun) cf. tur-uq ‘place of residence’ /subum/<skr. *subhūmi* ‘a good place’ (Monier).
- 5) /adil/ はおそらく ”DYN/adīn/ ‘other, another’ の誤りと考えられる。/ariṛ sāmäk/=‘лес’ (*suvarṇaprabhāsa* 517 ДТС). /arsī/<skr. *ṛṣi* 「神聖」一即ちわち仏のこと。

- 6) YUSD'N=*yüz*/'a hundred, a great many'+*tän*/ (Mongolian suffix, 'possessive')?
 7) /*çitri*/*<skr. citra* 'excellent, distinguished' (Monier).
 8) /*çit*/*<skr. jeta*「祇陀」—*tigin*「祇陀太子」=波斯匿王の王子(赤沼)。
 /*çitavan sāṅram*/*<skr. jetavana saṃghārāma*「祈唵黎那」—「衆園」(織田)即ち, *jetavana anāthapiṇḍadasyārāma*「祇陀樹林」(赤沼)のことか。
 9) /*pīrasānci*/*<skr. prasenajit*「波斯匿」—舍衛国の王名。(織田)。

XIIb

- 2) /*širavast*/*<skr. śrāvastī*「舍衛」(Soothill).
 3) /*qay*/*<chin. 街*。
 12) /*anaatapīndikī*/*<skr. anāthapiṇḍika*「給孤独」(赤沼)。

XIIIa

- 7) 力=*küc*。
 11) /*yunγu*/='*мытъе*' (Suvarṇaprabhāsa 475 ДТС).
 12) /*tap-tau tiši*/*<chin. 塔頭弟子* cf.「大寺の高僧入寂の後其徒弟師徳を慕い塔の頭を去らず房を構えて住し……」(織田 p. 1113)。

XIVa

- 3) /*inçilü*/=*inçi-*/ 'eine leichte Beschädigung erleiden, sich etwas brechen (Radloff *Wb*)+*ü* (gerund), /*irtäki*/='*eski*'「昔」(STŞ p. 66).
 4) /*idän*/*<idi nän* (ETS p. 198).
 6) /*buduqmäs*/=*bud*/*<skr. buddha*+*uq* (denominal verb)「仏となる」か? /*boš taš ilig* 'empty'-'outside'-'king'=空王。
 8) /*intkisin*/=*intki*/*+sin* (3rd. pers. sing. acc.) *intki yaraγ=asağlık işler*「下なる仕事」(ETS p. 142).
 11) /*bat* 'worthless' /*bašqa*/=*baš* 'a wound, ulcer'+*qa* (dative) cf. *qartqa basurγu ol* 'one must press on the ulcer' (Clauson p. 374).
 15) /*sim*/*<skr. śma*「四摩」「別住」(織田)。

XIVb

- 1) /*bodimandal*/*<skr. bodhimāṇḍala*「道場」(Soothill), 七日=*yiti kün*.
 3) /*partakčan*/*<skr. pṛthagjana*「凡夫」(Soothill).
 6) 時=*öd*.
 7) /*çöpdik*/ *biš çöpdik*=*skr. pañca-kaṣāya*(Śinasi Tekin "Die kapitel über die Bewußtseinslehre im uigurischen Goldglanzsūtra (IX. und X.)" 1971. Wiesbaden p. 33),即ち /*çöpdik*/ は *kaṣāya* に相当する, ここでは「濁世」—五濁悪世(織田)を指すものと考えられる。

- 9) /tužit/<skr. *tuṣita*「兜卒」/tužit tāṅri yir/=兜卒内院一弥勒菩薩の浄土、菩薩身の最後として彼天の四千歳の間此に住し已て人間に生じ竜華樹下に成仏する(織田 p. 1277)。
- 10) /udumbara/<skr. *udumbara*「優曇」(織田) /pari'catik/<skr. *parijātakā*「天花の名、彼岸生」(織田)。
- 12) /taycu/<chin. 大誦, cf. 註 XIa-4.
- 14) /paramart/<skr. *paramārtha*「波羅末陀」—‘the highest truth, ultimate truth’ (Soothill).

参 考 文 献

- M. Monier-Williams “*A Sanskrit-English Dictionary*” 1970 (5版), Oxford.
- W.E. Soothill and L. Hodous “*A Dictionary of Chinese Buddhist Terms*” 1937, London.
- F. Edgerton “*Buddhist Hybrid Sanskrit*” Vol. II: Dictionary, 1953 New Haven.
- 織田得能『仏教大辞典』1917.
- 望月信亨『仏教大辞典』1931～1936.
- 赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』1935.
- 『翻訳名義大集』(MP) 1973 (5版) 京都帝国大学
- 荻原雲来『梵漢対訳仏教辞典』(MP₂) 1959.
- B.M. Наделяев “*Древнетюркский словарь*” (ДТС) 1969, Leningrad.
- G. Clauson “*An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*” 1972, Oxford.
- W. Radloff “*Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialect*” I-IV. 1893, 1899, 1905, 1911, St. Petersburg.
- G.R. Rahmeti “*Eski Türk Şiiri*” (EİŞ) 1965, Ankara.